
I S～神の名のIS～

大神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ISと神の名のIS

【Nコード】

N9686V

【作者名】

大神

【あらすじ】

IS量産世界シェア第一位の会社の社長が、IS学園に入学してきた。なんとその社長、男だったのだ。彼はどんな波瀾万丈な学園生活を送るのか！？

世界で二人目の男性IS操縦者彼の運命は？

作者はこの作品が処女作です。それでもよしという方はどうぞ、御覧下さい。

オリキャラ&オリIS設定

9／4改訂(前書き)

どうも、初めまして。大神です。最初に言っておきます、俺はかなーり、文才がない！しかも、駄文だ！それでもよいという方は、どうぞ、進んでください。

それでは、ISく神の名のISく始まります！

オリキャラ設定

主人公

名前 紅 神夜 (くれない こうや)

年齢 15歳 (入学時)

性別 男 (男の娘)

身長 180cm

体重 62kg

容姿 髪は紅色のかなりの長髪、腰まである。後ろは、最後まで
んで縛ってある。

瞳はアクアブルー。体は細く、女性とよく間違えられる。

趣味 料理(プロ同然)、鍛錬、読書(漫画から原書まで様々)
機械いじり。

特技 武道全般、射撃、楽器演奏、完全記憶、平行思考、ハツキ
ング。

好きな物 笑顔、パソコン、本、魚。

事 料理を食べてもらう、読書、創造、ハッキング。

人 千冬、一夏。

嫌いな物 泣き顔、トマト。

事 敗北、退屈な事。

人 女尊男卑の世界に浸っている奴、他人を馬鹿にする人。
性格 基本的に温厚。ただし、仲間が危険になったら、冷徹人間
になる。人の心を読む

事が出来る。年下に甘い。

専用機

ゼウス
創造神

備考 量産機IS製造シェア世界第一位の会社『COU』の社長

兼会長。一代で立ち上

げた会社をIS製造シェア第一位にした凄腕社長と、その道の世界では有名。

ある日、自社のIS工場で視察中、誤ってISを起動させてしまった。その際、

ISランクを計測したら事件がおきた。その時点では、ISランクは『S』が最

高だったが、神夜のISランクは、『SSS+』と出てしまったのだ。そして、

視察中一緒に居たIS委員会委員にIS学園に行くように言われたので条件とし

て『自由国籍』と『ライセンス』を取得。電子演算処理システム『ヴェーダ』

を製作。二年前に事故で両親を失っている。土音の兄。

主用単語辞典

『COU』
神夜の立ち上げた会社の名前。この会社はシャーパーンの芯から、

ISまで何でも扱っており、全世界に828店舗を有するチェーン店

なのだ。しかし、三部署ほど、宇宙空間での活動を計画している

『自由国籍』
読んで字のごとく、自分の好きな国に国籍を置くことが出来る。

神夜は、一応、まだ日本に置いている。

『ライセンス』
ISをいつでもどこでも誰の承認無しに起動できる免許のようなもの

主要キャラ設定

名前	夕暮 暮葉	(ゆうぐれ くれは)
年齢	54歳	
性別	男	
身長	174cm	
体重	60kg	
容姿	「美○しんぼ」の海原○山を少し丸くした感じ。	
趣味	読書(特に時代小説) 囲碁、将棋。	
特技	ワインの一気飲み。	
好きな物	酒、囲碁、将棋。	
事	神夜の作った料理を食べること	
人	神夜、社員、妻。	
最近の悩み	ジジ臭くなっている、妻が恐い。	
性格	「美○しんぼ」の海原○山の性格の棘が無くなった感じ	
備考	『COU』の副社長。神夜の料理が大好き。それなりに有能な人材。妻帯者。	

名前	紅 士音	(くれない しおん)
年齢	5歳	
性別	男	
身長	90cm	
体重	30kg	
容姿	神夜を小さくしてショートヘアにした感じ	
趣味	神夜と遊ぶ。	
特技	ピアノとヴァイオリンの演奏、絶対音感。	
好きな物	神夜の料理、ピアノ、ヴァイオリン。	
事	神夜の作った料理を食べること。	
人	神夜、千冬、一夏、シャル。	

嫌いな物

トマト。

事

何かを途中で投げ出すこと、止めること。

人

神夜を馬鹿にする人。

性格

少し暗い風陰気を纏っている。お兄ちゃん大好き。

備考

少しばかりブラコン。家族と友達、神夜が、気を許した人には、甘える。

神夜の弟で、神夜達の親、紅夫婦が事故で亡くなったので神夜と、IS学園に住

んでいる。何度か夕暮夫婦が預かる話があったが、土音本人の強い希望のため、

神夜と一緒にIS学園に行く。部屋は、一夏、神夜と同じ。語前に「……………」が付く。

オリジナルIS、特殊AI設定

オリジナルIS設定

名称 ゼウス 創造神

機体説明

紅 神夜が単独でコアから（束のパソコンにハックして）開発した、理論上では第二十

世代型のIS。

特徴は、限りのない拡張領域<バススロット>と、ワンオフ・アビリティの他に、ト

ンでも能力があることだ。このISの能力は、操縦者つまり神夜が望む形に変化するこ

とだ。神夜は主に、ガンダムや、対戦相手のISに変化させている。『ヴェーダ』にリン

クする事によって、正体不明機や、相手のデータを全て取得する。

創造神^{ゼウス}自体の装甲は、背中にコーン型のGNドライヴと、頭にバ
イザー、体

中には、最低限の装甲と、エネルギーシールドが張ってあるだけ
だ。

このISには、神夜が作ったAIが搭載されている。
ワンオフ・アビリティ・・・色彩多色ヘカメレオン◇

ISを自分の好きな色へ変える（ある意味は特になし。気分の問
題）

能力・・・創造^{スキル}
^{クリエーション}

操縦者のイメージで武器やISの形を造り出す

特殊AI設定

名前 ティエリア・アーデ

容姿 まんま、機動戦士OOガンダムの映画のティエリア。

アンドロイドverは、クあんたに刹那と一緒に乗ったテ
ィエリア。

（CV神

谷 浩史）

備考 神夜がISを開発した時に、どうせだからと、一緒に生み
出した人格AI。

『ヴェーダ』を管理している。その後、神夜の作った、自
身の身長 $1/10$ アン

ドロイドに移す事で人間界を動き回れる。IS学園では神
夜肩に乗っている。

その他のオリジナルIS

名称

役割

アレース

指揮官機

タナトス

接近戦用

アルテミス

中距離用

アポローン

遠距離用

どうでしたか？今回は、オリキャラの設定だけですが、私、ネーミングセンスすらないので不安です。自分、不器用ですから。

さて、次回は、プロローグですが、皆さん、みてもらえますか？こんな駄文を書く作者でも応援していただければ恐縮です。次回も、よろしく願いいたします。

m () m

プロローグ 9／4改訂(前書き)

どうも、大神です。オリキャラ&オリIS設定に続きプロローグも今日だそうかと思えます。それでは、どーぞ！

プロローグ 9／4改訂

プロローグ

神夜Side

「本当に良いのかい士音くん？」

「……ハイ。学園長先生も許可してくれました。そうですね、兄さん」

「ああ。だが、暮葉副社長が言っているのは、お前の友達のことだぞ？」

「……分かっています。あそこより兄さんのトコがいいです」

「……そうか。お前の決めたことなら俺は口を出さない。だが戻りたくなったらすぐに言うんだぞ。……そう言う事なので暮葉副社長。お心遣い感謝する」

「ですが、紅社長あなたの勉強に支障は出ませんか？」

「問題ない。それに珍しく、士音が私にお願いをしてくれたんだ無下には出来んさ」

「……貴方が『私』というときは本気の時でしたね。分かりました。家内にはそう言うっておきます」

「ああ、夫人には大変お世話になったな礼を言っておいて欲しい」

「了解いたしました」

「ありがとうございます。貴方にもお世話になりっぱなしだな。今までありがとう、これからよろしく」 ニコッ（満面の笑み）

「……………よろしくお願いします」 ペコッ

「ッ!？こ、こちらこそお願いします」

「……………会社の話はしなくて良いのか？」

「ああ、そうだった。ありがとう、ティエリア」

「忘れていたのか……」

「暮葉副社長、会社のことなんだが」

「ハイ」

「基本的にいつもどうりの事をしてくれ、私の承認が必要な書類はデータ化して、ティエリアに送信してくれ」

「了解いたしました」

「ティエリアは、予算や、社員の給料を編成してくれ。あと、さっき言った、私の承認の必要なデータの表示を頼む」

「了解」

「あとは・・・そうだな。会社の方で何か問題があったら、すぐに連絡をくれ。どんな些細なことでもな。それがたとえ授業中にあつたとしても、だ。会社を頼んだ」

「了解いたしました。それでは、行ってらっしゃいませ」

「行ってくる。行くぞ土音、ティエリア」

「・・・・・・・・ハイ。行ってきます、暮葉さん」

「逝ってくる」

「・・・・・・・・字が違います」

「僕の場合は、当てている」

「このあと、お前に何があるんだ」

そんなこんなで今日から俺たちはIS学園の生徒だ。どんな波乱万丈の学園生活が始まるんだ!?

プロローグ 9／4改訂（後書き）

じかいは、やっと、一話目ですまだ原作介入はまだしない予定です
何時になるかはわかりません！応援よろしくお願いいたします

第一話 9／4改訂（前書き）

どどもども。大神です。今回は第一話なんですがやっと我がスキル『駄文』が発揮できます！「発揮しちゃだめだろ」と言うつつこみは無しの方向で。
それでは始まります！！

第一話 9／4改訂

第一話

神夜Side

IS学園に着いた俺たちは、学園長室に来ていた。

「このたびは、私の願いを聞き入れていただき誠にありがとうございます。」

俺の前にいるのが学園長の轡木 十蔵さんだ。表向きはその妻である女性が学園長を務めているらしいのだが、実務に関してはこの人がやっているらしい。

「こっちがお話した弟の士音です。で、これが私の作った特殊AIのティエリアです」

「……………紅 士音です。よろしくお願いします」

「ティエリア・アーデだよろしく頼む」

「……………ティエリア。敬語。」

「ハッハッハ、構いませんよ。それより貴方が……あの、『COU』の社長兼会長ですか。長生きすると面白いものが見れていいですねえ」

「何をいってるんですか。まだまだお若いじゃないですか」

「そう言ってくれるのは貴方ぐらいですよ。・・・さて、条件の方なんです」

「もちろん解かっています。ウチの第三世代型IS四機、各一機ずつ及び、二千万円の寄付でしたよね」

「はい、そうです」

「ご安心ください明日、または明後日には届けさせます」

「それを聞いて安心しました。では交渉成立です。後は、一階の職員室へ行ってください。そこで、クラスの紹介を受けてください。」

「分かりました。・・・あの、織斑おりむら 千冬ちふゆさんは何年の職員室ですか？」

「?。確か、一年生の職員室でしたけど・・・彼女に何か？」

「ええ、ハイ、まあ・・・それじゃ私たちは行きます」

「・・・・失礼しました」

「あつ、ハイ。楽しい学園生活を」

そうして、俺らは学園長室を出た。

「・・・・あの、兄さん」

学園長室を出た瞬間に土音が俺に声をかけてきた。

「ん？何だ？もしかして、お前をここに入れるために出した条件のことか？」

「・・・・・・・・ハイ」

「そんなこと、お前が、気にするな。お前の頼みなら出来ることならなんでもする。オレが決めたことだ」

「・・・・・・・・でも」

「でもじゃない、それに助かったのはこっちだしな」

「・・・・・・・・どういことですか？」

「神夜の会社、『COU』は、儲かりすぎてな、もう少して、国への、納税をこれまでに以上にあげられることになりかけていたんだ。税をあげられると社員の給料から引くことになるからな、頭を抱えていたんだ。そこにお前と言う救世主^{メシア}が現れたんだ二千万の寄付だが、あの金はギリギリ納税をあげられないように設定した金額の余りだ。お前はウチの社員を救ったと思っていいんだ」

「ティエリア、機密事項をべらべら喋るな誰かに聞かれていたらどうするんだ」

「すまない」

「まあ、そういうことだ。お前が気にすることなんて何もないんだ・・・。まあ、それでも恩返しをしたいというなら今日、帰ったらおまえのヴァイオリンを聞かせてくれ。ただそれだけでいい」

「・・・・・・・・本当にそれだけでいいの？・・・・ならそうする」

「よし、良い子だ。・・・っと着いたな」

どうやら、話していたら、着いたようだ。 コンッコンッ

「失礼します」

「・・・・・・・・失礼します」

一年生職員室に入ると、迎えてくれたのは・・・

「わ、わわわわ。ど、どいてくださーい」

書類のオバケだった。

「オバケじゃないですーう。あっ」 バサバサッ

地の文を読まないでください。とか言ってる場合じゃねえな、書類の山が崩れてきている。

「よっと・・・」

良かった。崩れ落ちてきた書類を何とか全て受け止められた。

「あ、ありがとうございます」

「いえいえ。それより入学の手続きをしに来たんですけど」

「あっ、ハイ、聞いてます。紅 神夜君ですよね」

「ハイ。これから三年間お世話になる紅 神夜です。そして、こっちが弟の土音、で、こっちが自分の作ったA Iのティエリアです」

「・・・・・・・・紅 土音ですよろしくおねがいします」

「ティエリア・アーデだよろしく頼む」

「ハイ。よろしくお願いします。私は、神夜君達のクラスの副担任、
山田 真耶やまだ まやですではこちらに来て、書類を書いてくれますか？」

「ハイ」

山田先生の机にいくと、何種類かの書類が重ねてあった

「これには名前だけ書けば良いんですか？」

「ハイ、後は教師の私達が書きますので」

書類に手をかけようとすると、土音が物欲しそうな目でこっちを見ていた。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・（じ〜〜〜〜〜）」

「はぁ・・・土音、お前の書類だけお前が書け」

「・・・・・・・・・・いのっ」

「ああ」

「クスッ、良いお兄ちゃんですね」

「まったくだ・・・」

「山田先生書き終わりました」

「はい。それでは、担任の織斑先生の所へ行きましょうか」

「織斑先生ってあの織斑 千冬先生ですか？」

「あつ、やっぱり知ってますか？それでは、応接室で待っていてください」

「はい」

そうして応接室で待つこと五分後

《ガラッ》

《「あつ、織斑先生！」》

《「ん？何だ、山田君」》

《「例の入学生が来たのでご挨拶をお願いしたいんですけど」》

《「ああ、来たのか、何と言う？」》

《「紅 神夜君で言うんですけど、どうやら先生のお知り合いだと思っんです」》

《「紅・・・紅・・・。分からんとりあえず、会ってみよう」》

そんな声が廊下から聞こえて来た。まあわからんのも、無理なわな。

「こちらです。」

織斑先生と、山田先生が応接室に入ってきた

「こんにちは、初めまして。このたび、このIS学園に入学することになった、世界で二番目にISを動かせた男。紅 神夜です以後お見知り置きを」

そして俺は自分の名刺を渡した

「フン、いっちょまえに名刺まで持っているの・・・か!？」

織斑先生は、オレの名刺を見た途端、顔に驚愕の色に染めた。

「おい、これは本物か？」

「もちろんです」

「織斑先生、その名刺に何が書かれていたんですか？」

「山田先生、彼は大手株式会社『COU』の初代社長兼会長だ」

流石の織斑先生も驚いているようだ

「ええー。あの、IS操縦者なら誰でも知っているという、あの『COU』ですかあ！IS量産世界シェア第一位の！」

「いや・・・IS操縦者以外も知っているとありますが・・・家電、文房具、衣服その他もろもろにも手を出しているんで」

割合で言うと、10人のうち9人は、ウチの会社の家電を使って居ると、言うことになりますからね。

「そうでしたね・・・」

「話している所に割って入ってすまないんだが・・・そろそろこっちの二人(?)を紹介して欲しいのだが・・・」

「ああ、ハイ。こっちが俺の弟の士音です。で、これが自分の作ったアンドロイドのティエリアです」

「・・・・・・・・紅 士音です」

「ボクの名はティエリア・アーデ神夜によって作り出されたAIだ。今は、神夜の作ったアンドロイドに命〈精神〉を宿している」

「紅・・・いくら男子二人の生活が寂しいからって家族とアンドロイドを学校に持ってきて来てはダメだろう」

「あなたは幼稚園生を一人で家に住ませろと？それに学園長には許可を貰っていますよ？それに私の意志だけで連れてきた訳ではありませんし。」

「すまない私が悪かった。親が、いな——ごほん、ごほん・・・すまない」

「いいですよ俺たちは気にしてませんから。人はいずれ死ぬ両親の場合はそれが少し早まったただけですから」

「・・・・・・・・兄さん・・・・・・・・」

「神夜・・・・」

「それでもすまない・・・・」

「ですから、大丈夫です。それより、早く入学試験をやりませんか？自分はこれからやることがあるので早くしたいのですが・・・・」

「そうだな、まあ、お前の場合もう入学は決まっているから稼動実験だけだな」

「分かりました。相手は、織斑先生でおねがいします」

「ほう、あえて私を選ぶか。いいだろうISランク『SSS+』の力見せてもらう」

「はい！」

場所は変わってIS学園第三アリーナ

「よし、只今から、紅 神夜の入試試験を開始するルールは、簡単教官の私を戦闘不能にしたら勝ち。逆にされたら負け。他に質問は？」

「織斑先生は本気で来てくれますか？」

「普段は4割くらいしか出さんが望むとあらば本気で行こう」

「お願いします」

《「両者ISを装備してください」》

山田先生と土音達は、アリーナのモニタールームに居るらしい。

「織斑先生のISは打鉄うちがねですか」

「ウチの教師は専用機の有無に関わらず打鉄か、ラファール・リバイヴだ」

「そうですか。なら、天空神展開ゼウス、能力解放創造打鉄スキルオープンクリエイション、ワンオフ・アビリティカメレオン、色彩多色白！」

そこには、新雪のように真っ白なISが展開されていた。

「行くぞ、打鉄・白うちがね・はく！」

「なにっ!? 白い打鉄だど!?」

「今回は、これでいきます」

《「それでは・・・開始!」》
ビィーーーーー

神夜Side off

真耶Side

こんにちは、山田 真耶です。本当は私が紅君の相手をするはずだ

ったんですが紅君の要望で、織斑先生が戦うことになりました。

「両者ISを装備してください」

織斑先生のルール説明が終わったようなのでISの装備を促します。

《「ゼウス天空神展開、スキルオープン能力解放創造打鉄、ワンオフ・アビリティー、カ色メレオン多色白！」》

なんか、紅君が聞きなれない単語の羅列を叫んでいます。为什么呢、土音君か、ティエリアさんに聞けば分かるかな？

「あの、スキルオープン土音君、クリエイションティエリアさん。今、神夜君の叫んでいた、スキル能力解放とか、創造って、何なんですか？」

「スキルオープン能力解放についてはボクが説明しよう。スキルオープン能力解放とは、文字どうり、スキル能力を解放することだ。だが、ワンオフ・アビリティーとは、また違う。今まで開発してきたISには、ワンオフ・アビリティー以外の、能力はなかったが、神夜もISにはある。これがどういう意味だか分かるか山田教論？」

「神夜君のISは、現行ISを凌駕している？」

「そのとうりだ。」

「……兄さんのISは、今の技術では到底再現できない世代。第二十世代ISとなっています」

「第二十世代って、今から五、六世紀ほど後になるじゃないですか！」

「ああ。まず第一世代というのは『ISの完成』を目的とした機体だ。次が、『後付け武装による多様化』を重要視した機体、これが第二世代。そして第三世代が『操縦者のイメージ・インターフェースを利用した特殊兵器の実装』空間圧作用兵器、BT兵器や、AICなどだな、だがそれを神夜は、独自の技術を使い、独自の機械を造り、たった一人で現行ISを超えるISを造り出した。二十世代の目的は、『操縦者のイメージで変化し、ワンオフ・アビリティ以外の、能力を持つIS』だ。」

「ワンオフ・アビリティ以外の能力を持つIS・・・操縦者のイメージで変化する・・・」

「・・・・・・兄さんのIS、ゼウス天空神の能力の説明ですが、ゼウス天空神の能力は、クリエイション創造は、自分のイメージで物を創造する能力です。兄さんは、とてつもなく強いので、せめて相手と同じ状態で戦おうと相手のISの形状で戦います。打鉄を選んだのも織斑先生と同等の力で戦うためでしょう」

「それって、裏を返せば手加減をしているとれますよね。」

「そうだ。本気になった神夜を止められるのは、神夜自身か、神夜が愛するものだけだろう」

「それって、織斑先生でもですか？」

「ああ、自分のイメージした物を創造出来るという事はシールドエネルギーを永遠に生み出すことができるということだからな」

「それって最強じゃないですか!!」

「そうだ。だから、神夜を止められるのは、神夜自身か神夜が心から愛するものだけだ。それよりも、そろそろ始めた方が良いのではないか？」

「そ、そうですね」

私はマイクを取った

「それでは・・・開始！」

こうして、紅 神夜君の、入学試験が始まりました。

真耶Side off

第一話 9／4改訂（後書き）

どうでしたか我がスキル『駄文』！だめだめでしょう！こんな駄文を書く作者ですが、これからよろしくお願いします！！

さて次回ですがとある人の両親が出てきます！これ以上言うとネタバレになってしまうので今日はここら辺で。

タモさん「また次回もみてくれるかな？」

視聴者「いーともー」

第二話 9／4改訂（前書き）

すみません、家の都合で更新遅れました。申し訳ないですm（
し m

今日は四話連続投稿、できればしたいと思います
では今回は、あのキャラの両親が出ます。まあネタバレですが、ど
うぞよんでください。
では始まります。

第二話 9／4改訂

第二話

千冬Side

「はああああああ！」

「フウンッ！」

ガキンッ！！！！

紅と私のISの刀が交わって金属の鈍い音がする。

「ハア・・・ハア・・・クッ！」

強い！この私が翻弄されている！？

「へへッ」

なっ！あいつ息が切れていないだと！この私でも切れているぞ！？
たった二時間近くやっているだけなのに、私だけ息が切れていてあ
いつは切れていない・・・あいつは化け物か！

「織斑先生次で終わりにしましょう」

なに！こちらのシールドエネルギーはまだ180あるのだぞ！クソ
ッ！馬鹿にしおって！

「殺れるものなら、やってみろオオオオオオ！」

「了解iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!」

ガキンっ!!!!ガゴン!!!!!!!!!!

シ・・・シールドエネルギーは・・・ッ!?

「織斑エンプティ。勝者紅 神夜」

アリーナに機械的な音声が響いた。私はISに乗ってから初めて直接的に負けた。私は弟と同じ年の男子に負けたのだ。

千冬Side off

神夜Side

「織斑エンプティ。勝者、紅 神夜」

勝った!人類最強に勝った!!

「ヨシッ!!」

「悔しいが、よくやってくれた。これで貴様もIS学園の生徒だ。これからもよろしく」

「有難うございます」

「ところで、最後の攻撃どうやって180から0まで持っていたんだ?」

「ああ、あれはあの一瞬のうちに、八回斬撃を食らわせただけです」
まあ、^{ゼウス}天空神だから出来たようなもんだしね。それに今までの経験も……

「そんな馬鹿な！ 私だって五回までしか出来ないぞ！」

いや、五回も出来れば十分だからね。

「今まで、何度も誘拐されそうになっているんだからこれくらいしないと撃退出来ないですよ」

「……お前も大変だったんだな……」

「ええ、ホントに……普通の誘拐犯だったり、愉快犯だったり、謎の企業の差し金だったり、兎耳の不思議の国のアリスの服を着て、ニンジンロケット乗った変態だったりしたな……その人に、ヨル君て言う変な渾名付けられたし」

あれ、ヘンだな……目から汗が出てきた……。

「本当にすまん……」

「?……なんで先生が謝るんですか？」

「いや、なんでもない」

「……兄さん、お疲れ様でした」

ティエ「よくやってくれた」

「紅君すごいですね！織斑先生に勝ってしまいましたよ！人類最強ですよ！これは大事件ですよ！」

「山田先生、落ち着いて下さい」

「あ、はい」

「先生、お願いですから、マスコミにタレコミしないで下さいね」

「何ですか？大ニュースですよ？名前を売るチャンスですよ？」

「先生、私の立場を考えてください。IS量産世界シェア第一位の会社の社長で世界で二人目のISを動かせる男子ですよ。私は、いまやそこらへんの一般男子ではないから名前を売る必要がないんですよ……」

「あはは……そうでしたね」

「……兄さん、お話もいいけどここに来た二つ目の目的忘れてませんか？」

「二つ目の目的？どういうことだ？」

「この学園に来たのは三つの目的があるんだ」

「三つ？紅の入学だけではないのか？」

「ええ、一つ目は、私の保身を考えての入学、二つ目は、土音の入寮及び授業参加の条件の確認のついでの顔見せ、三つ目は貴女にこ

れを渡すためです。織斑千冬さん」

俺はある人から預かった手紙を織斑先生に渡した。

「これは？」

「貴女のご両親おりむらの織斑はるか 春香さん、織斑おりむら 秋人あきとさんからです」

「!?!?・・・何故あの人たちが今さら・・・。。。。ッ！」

ダンッ!!

織斑先生は俺を壁に叩きつけた。

「クッ・・・・・・・・・・」

「兄さん！」

「神夜!!」

「織斑先生ダメです!!!!」

士音が、口癖(?)の「・・・・・・・・」を抜かすほど驚いている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「紅! あの人達は何所に居る! 知っているんだろ! 教えて! でなければ、今此処でお前を殺す! 今の私は、あの人たちを一発殴らなければ気が収まらない! 何所だ! 教えて! 知っているんだろ!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あくまで、沈黙を通すかなら・・・」「――した」なに？

「・・・・・・・・・・に・・・・・・・・・・した」

「何だ！ハッキリ言え！」

「お亡くなりになりに・・・・・・・・・・になりました」

「ッ！？・・・・・・・・・・そうか・・・死んだか・・・」

「その手紙は、遺書だそうです。自分達に従うのは嫌かもしれないけど必ず読んで欲しいとのことです。今後の事が書かれているそうですよ」

「そうか・・・さっきはすまなかったな」

「いえ、ご心配なく。ただ肩甲骨をいためて動かないだけなので」

「それは大丈夫といえるのか？」

「大丈夫です。それよりも、その手紙内容を教えてくれませんか？私も多少興味がありますので」

「む？そうか分かった」

神夜Side off

千冬Side

紅から渡された手紙の内容を覚えてくれとの催促があったので手紙

の入っている封筒を開封してみた。

ガサッ

そしたら、手書きの手紙が出てきた。その内容は……。

『拝啓 織斑 千冬、一夏様へ

いきなり、こんな手紙を出してすみません。突然で在り来たりですがあなた達がこの手紙を読むときには私達はこの世には居ないでしょう。

思えば12年前あなた達を捨ててしまつてごめんなさい。言い訳にしかないだろうけどあの時は、ああするしか方法が無かったの。私達は、生まれた頃から、治癒能力、身体能力に長けていてドイツのとある研究所に目を付けられていたの。それまでは、何とか逃げられていたんだけど、奴ら、何所からかあなたたちのデータを持ってきた、「お前らが、このまま逃げつづけるんだつたら、お前らの子どもを実験台にする」と脅してきたのそれで仕方なく貴女達を捨ててしまったの。仕方の無いことだったとしても、親として情けないことをしたわよね、面倒見の良い千冬の事だから自分のことをほおつて一夏に負担が掛からないように頑張ったんじゃない？でも、負けず嫌いで、優しい一夏だから、千冬の負担が和らぐように頑張ったんじゃない？ふたりは、にたものどうしだからいいきょうだいになったんでしょね。今私達は研究所から抜け出して、紅さんと言う人の家に匿って貰っています。ですが、私たちは実験で体中を弄繰り回されて、脳まで掻き混ぜられてしまったので、もう一ヶ月有るか、無いかでこの世を去ってしまうと思います。千冬のウエディングドレス姿が見たかった……。一夏のタキシード姿が見たかった……。もっと二人と楽しく、元気に、生活したかった。一緒に笑いあいたかった、泣きあいたかった、ケンカしたり、抱き合っ

たり、苦しみあったり、遊びたかった。悔しくて悔しくて堪らない・
・もっと、もっと一緒に居たい。今すぐ会いたい。でも、私達は、
もうすぐこの世を去ります人間、死期が近いと分かる紋なんですね。
あなた達のことは、そこに居ると思われる、紅一家の方達に任せて
てあります。これに従うかはあなたたち二人次第です、二人で仲良
く決めてください。それでは、さようなら。

織斑

春香 秋人より。

追伸 何も残せないでごめんなさい

敬具』

こんな内容だった。

「・・・この・・・馬鹿両親がっ・・・こんな・・・こんなことな
ら・・・もっと・・・はつきり言っていだらう・・・
・・・母さん・・・父さん・・・ごめんなさい・・・いま
までうたがっていて・・・ごめんなさい・・・うっうう・・・
うう」

千冬Side off

神夜Side

織斑先生は、手紙を見てすぐに泣き出していた。手紙に何が書かれ
ているかは分からないが、邪魔をしてはいけないという事は、分か
った。

「織斑先生・・・」

「・・・今はそつとして置きましょう」

「そう・・・ですね」

それから、五分後、織斑先生が復活した。

「みっともない所を見せてすまなかった」

「いえ、逆に嬉しかったですよ？ 織斑先生のいろんな表情を見て」

「忘れてくれ・・・／／／／／／／／／／」

本当に恥ずかしそうだ。

「そうだ、紅これどういう意味だか分かるか？」

織斑先生はさっきの手紙の一文を指す。

『紅一家の方達に任せてあります』

「私達、紅家があなた達織斑家を預かり、養うということでしょう。そんな話を私の両親もしていましたし」

「そうか・・・この申し出を受けると、どうなる？」

「紅家は、私と、土音と、ティエリアしか居ませんので、土音とティエリアは金を稼げないので、実質私が養うことになりますね。大丈夫ですよ、小遣いは、払いますので」

「そういう問題じゃない。年下が年上を養うってどう思う」

「普通じゃないですか？」

「は？」

「だって親の老後を養うと思えば良いんですよ。それに養子じゃなくても、兄妹だから養うということも出来ますし。現に織斑先生もそうしてきたでしょうそれに私と先生の年収も私の方が、多いですし」

「……………まあ良い。一応、一夏にも相談してみる」

「そうしてください」

「ああ。山田君紅に寮の部屋鍵を」

「あ、はい。これです。織斑君と同じでよかったですよ。でも今日は、織斑君をびっくりさせるために織斑君は他の女子生徒のところにいてもらっているので居ません。明日から同居してもらいます。後は……そうだ、紅君。紅君のISって第二十世代なんですか？ ティエリアさんから聞きました。すごいですね！！」

「なに！？ 第二十世代だ！？（あいつは知っているのか？ ……いや知っていて許可したんだろうな）」

「そういう事に成っています。余り口外しないで下さいね」

「……………兄さん。ごめんなさいつい、言ってしまいました」

「すまない。重要機密だったな」

「いいよ。どうせ後々ばれるんだから」

「本当にいいお兄さんですねえ」

「ああ、あいつなら、私達をどん底からでも這いあげてくれるかもな。」

「それでは、織斑先生、山田先生私達は、寮に行きます。また明日」

「ああ、明日の朝、お前の部屋に迎えにいくそれまで部屋から出るなよ」

「夕食と朝食は？」

「夕食は今の内にいけ、今は誰も居ないだろう。朝食は私が持つていく」

「分かりました有難うございます。いくぞ、土音、ティエリア」

「・・・・・・はい」

「わかった」

こうして俺たちの学園初日が終わったのだ。

翌日織斑先生が来たのが9時過ぎだったので早めに腹が減った土音を落ち着かせるのが大変であったのは余談だ。

第三話 9／4改訂（前書き）

こんどは三話目です投稿できなかった間にワープロで執筆していたので溜まってます・・・・・・。

今回は兄弟愛、オリキャラがキレたりがあります。
いつもより長いですが・・・・どうぞ！

第三話 9／4改訂

第三話

神夜Side

織斑先生が持ってきてくれた朝食を食べ終わって俺たちは、自分達の教室、一年一組に向かっていた

「織斑先生。朝食を持ってきていただいたのは、嬉しいのですが、もう少しばかり早く持ってきては頂けなかったのでしょうか」

「仕方有るまい。七時に起きて、着替えをし、学食にたむろっている馬鹿どもを説教し、会議に出て、お前らの朝食を買っていたのだから」

「その学食にたむろっている人たちに説教をして私達に朝食を持ってきていただいてから会議に行く。という事は出来なかったのですか？二度手間でしょうに」

「……………さあついたぞ私が呼ぶまで此处で待っている」

「織斑先生話をそらさないで下さい。そして動揺しすぎです、まだ四組の前です。あなた一組の担任でしょう。」

おっ、織斑先生が赤面しているこれは、チャンス！ パシャ！
パシャ！！

携帯のカメラで写真を取ってみた。おうおう、カメラ映り良いね！

「紅、今何をした？」

「何って織斑先生の赤面写真を取ったんですよ」

「今すぐ消せ！」

「勿体無いですよ。せっかく良い顔してたんですから。なあ、土音、ティエリア？」

「……………はい。凄く可愛かったです」

「良い顔だったな」

「ツ／＼……………と、とにかくだ今すぐに撮った画像を消せ！」

「いやd「死ぬk」分かりました今すぐ消すので、拳を下げてください」

まあいいや。死ぬよりはマシだろう。そんなわけで携帯をいじくって　ピッピッピ　と。

「ほら、これでいいですか？」

「よし、良いだろう。ところで、その一人称は直らないのか？」

「と、いいいますと？」

「その一人称だと、ただでさえ女顔なのだから『私』なんていうともっと女に見えるぞ髪も長いのだから」

「ああ、そのことですか。これは癖とかではなく、わざとやっているんですよ」

「何のためだ？」

「何のためと聞かれても、自分の態度を示してるんですよ」

「態度？」

「はい。私と言うときは、公の場とか、本気で言っている時。俺と言うときは、私的な場という風にね。先生が変わるというんでしたら変えますが」

「ならば変えろ。時間も無いから行くぞ」

「はい。そうだ、ティエリア、ちゃんと拾ってくれただろうな（ボソッ）」

「ああ一応な。しかしこれが役立つのか？（ボソッ）」

「ああ、たまには商売で危ない橋を渡ってみたいだろ（ボソッ）」

「なるほどそうかそういうことか。たまには個人で商売をしたいと（ボソッ）」

よく分かっているじゃないかティエリア君流石、俺の相棒！

「（よし今度こそ一年一組の前だ）ついたぞ、紅。私が呼ぶまで此処で待っている」

「いま心の中で場所確認しましたね。不安だったんですね？　そうですね？」

「・・・・・・・・」

「凶星か」

「・・・・・・・・凶星ですね」

おや、珍しい土音がツツコミに周っている。

「ずぼS・・・出来るだけ早く呼んで下さいね」

「善処しよう」

神夜Side off

一夏Side

学園生活二日目。俺はいま、物凄い憂鬱感に浸されている。

学園生活初日からヘタレ発言をし、千冬姉に脳細胞二万個撃退され、セシリアとか言う代表候補生だか何だかに決闘を申し込まれ、やつと静かになると思って寮に帰るとバスタオル一枚姿の我が幼馴染の、篠ノ之 箒に出会って木刀で殺されそうになりそれが原因であいっは、朝から不機嫌だし。ハア・・・なんで俺ばっかりこんな目に会うんだ。

おっと噂をすればなんとやら、俺の実姉で一年一組の担任、織斑千冬先生がやってきた。

「織斑、紹介を有難う」

地の文を読まないで下さい。

「無理な相談だ」

「じゃあ読んでもいいから先に進めて下さい！クラスの皆の頭に、マークが浮かんでいるから！」

「うむ。そうだなそれではSHRの前に、ショートホームルーム自情があつて、入学式に間に合わなかった奴を紹介する」

クラス全体がざわつくそらそうだ噂が大好きな女子達の情報網をかいくぐってやってきたのだから。だがそんなことに俺は興味は無い何故なら

「（どうせそいつも女子なんだろうからな）」

「織斑、良かったな。仲間が出来たぞ」

はい？それってどういう？女子なんだろう？仲間も何も有るのか？

「入れ」

千冬姉がそう言うのとドアが開いて、転入生（？）が入ってくる。

クラスがさっきまでとは一変静まり返った。無理も無い。だってそいつが――男子だったのだから。

一夏Side off

神夜Side

織斑先生が入って行った瞬間

《「織斑、紹介を有難う」》

一夏君の心でも読んだのかな？

《「無理な相談だ」》

これは読んだな。

「てゆうかこれ、また待つルートかも」

「……………また待つんですか？待つの嫌いです」

「俺もだよ……そうだ、ティエリア。この学園のセキュリティ、ハックしてくれ。んで、俺が合図を出したらさっきの写真をこの学級の電子板に出してくれ。此処で、商売＋仕返しをする。土音を待たせた罰だ」

「分かった」

《「入れ」》

「おっ、予想より早い。まあいいや。いくぞ」

「……………うん」

「やっとか」

「失礼します」

「紹介しよう紅 神夜だ」

「只今紹介預かりました紅 神夜です趣味は、料理、鍛錬、読書、後は機械いじりかな。あとこいつは、俺の弟ですちよつと事情があって連れてきました。あとこれは、オレの造ったAIでいまはアンドロイドに命〈精神〉を移しています」

「……紅 土音です」

「ティエリア・アーデだよろしく頼む」

「お、男？」

「はい。こんななりですが男です」

「きゃ……」

「ッ！土音この耳栓付けろ！」

こいつら正気か？こんな所で叫んだら土音の鼓膜が破けんだろうが。

『きゃあああああ——ッ！』

訂正。土音じゃ無くても破れそうだ。その威力さながら音波兵器。いやマジ。ホントに。

「男子！二人目の男子！」

「しかもうちのクラス」

「本格的美形！大人の色気むんむんの！しかも守って欲しい系の！」

「その弟君も可愛い！」

「お兄さんと真逆の守ってあげたい系！しかもこっちも美形！」

「しかもおどおどしてる！」

「お兄ちゃん好き！」

「ティエリア君は、カッコイイ！」

「でもあの声聞いた事ある！」

「あっ！私も！確か、夏m「ストップ！」」

「山田先生、微笑んでないでどうかしてください」

「あ、はい皆さん！静かにしてください！まだSHR中ですよ！織斑先生が起きますよ」

しん・・・・・・・・ おおすげえ織斑先生の名前を出した瞬間静まり返ったぞ

「お前らそれはどう言う反応だ。それに山田君。何故そこで私の名

を出す？自分の力でやってくれ」

「あははは・・・」

山田先生。心中お察しします

「・・・ティエリア（ボソッ）」

「何だ？（ボソッ）」

「やはりさっきの件は忘れてくれ、予想以上に織斑先生に迷惑をかけてしまった。（ボソッ）」

「分かった。しかし画像自体は取って置いていいか？利用価値があると思うし、何より少し気に入ってしまった。（ボソッ）」

「・・・母さん（開発者さん）、ティエリアが初めて恋をしたよ」

「ええ父さん（お手伝いさん）。ティエリア、人に産んで上げられなくてごめんね？」

「？。何の話だ？僕はこの体に満足している」

まあ、ティエリアが初恋をした所で・・・

「山田先生、俺の席は何所ですか？土音も居るので、余り邪魔に成らない所が良いんですが・・・後、せっかいですから、織斑君とも近い方がいいのですが・・・」

「紅！お前は、オレの神だ！」

おお、あれが噂の織斑君か。流石、織斑先生の弟。なかなかいい顔立ちをしている。売ったら、いくら位いするんだろ。どうせもうこのクラスの一人や二人誑かしているんだろ、たとえばあの窓際のポニーテイルの子とか。

「紅、人の弟を売ろうとするな。しかしお前の勘は正しいぞ。確かにこれはあれを誑かしている」

「ほほう、ではこれ以上取り巻きが増える事もありえると」

「ああ、そして早く結ばれて欲しいもんだ。そしたら私も安心できるのだがな」

「織斑先生あなたの役割、貰っていいですか？ついでにあなたの世話もしますよ？」

「別にいいが、お前はいいのか？自慢じゃないが私の判定は厳しいぞもしかしたら今度はお前にこないかもしれないぞ？」

「ははっ、お手柔らかに。それに、俺の点に関してはご心配なく。で、山田先生俺の席は・・・」

「あ、はい。廊下側のその席に作らしてもらいました。もちろん、織斑君の隣です」

「ありがとうございます。では織斑先生、放課後に昨日の話の返事を聞かせてもらっていいですか？」

「その話だが本当にいいのか？」

「No Problem（問題なし）」

「そうか・・・では、織斑、紅両名は、放課後職員室に来るように」
その言葉を聞いて、俺は席についた。

「よう、紅俺の事は知っているだろうが織斑 一夏だ。一夏って呼んでくれ。後、何で放課後呼ばれたか分かるか？」

「わかった。じゃあ俺の事は神夜って呼んでくれ。これから、よろしく頼む。ほら、士音、ティエリア、お前らも。それと放課後の事だが、知っているが面白そうだから教えない」

「・・・・・・紅 士音です。士音って呼んでください」

「ティエリア・アーデだ。ティエリアと呼んでくれたら嬉しい。というか他は嫌だ」

「わかった。よろしくな神夜、士音、ティエリア」

「ああ」

「よろしく頼む」

「・・・・・・よろしくお願いします一夏お兄ちゃん」

「ブホオオオッ！」

一夏の口から愛が出た

「お、織斑君！？どうしたんですか！」

「先生問題ないですただ、一夏君が、ボーイズラブとシヨタコンの気を同時に開花させたただけなので。あ、一応言っておきますけど相手は俺じゃないです。土音です。土音は、嫌がっているけど」

「え、ええええええ！本当ですか！？織斑君！？」

「い、イヤ、違います！」

「ほんとか、一夏！見損なったぞ！」

「だから違うっての！」

「そうか、だからいままで寄って来ていた女子に興味を示さなかったのか・・・織斑、いまから自首しよう。これ以上何か起こる前に」

「千冬姉までか！」

「そう言えばさっき『紅！お前はオレの女神だ！』とかいったよね！」

「捏造されている！？」

「織斑×紅兄ハアハア紅兄×織斑ハアハア織斑×紅弟ハアハア」

「此処の生徒は腐女子ばかりか！」

あはは、楽しいな」（笑）

「神夜！この状況をどうにかしろ！お前が撒いた種だろう！」

「アッハハハッ、分かった、分かった。織斑先生、冗談なので、一夏をそんな哀れむ目で見ないであげて下さい」

「冗談ですか、良かったです！」

「本当か！一夏はまだ女子に興味があるのだな！」

「まだとか言うな！」

「ふ、ふん！私は最初から分かっていた」

「嘘つけ！一番酷かったぞ！」

「ちえゝ。違うのかゝ」

「面白そうなのにゝ」

「面白そうとかで人の人生決めるなー！」

「一夏」

「ハア・・・ハア・・・ん？」

「ツツコミお疲れ」

「オ・マ・エ・の・せ・い・だ・ろ・う・が！」

いやゝ人で遊ぶのって面白くて、つい・・・

「じゃあ、山田先生、授業始めてください」

「は、はい！」

返事をする山田先生は教壇へ・・・

「きゃん！」

行く前に段差で転んだ。本当に先生かこの人？

「うゝゝ」

「山田君・・・・・・・・」

「ひゃ、ひゃい。えっとでは、一時間目を始めます」

そんなこんなで一時間目終了・・・只今休み時間・・・

「いやゝにしても爆笑もんだったね。あの参考書を電話帳と間違えて捨てたと聞いた時は」

「返す言葉ありません」

そう、一時間目の授業中一夏がうなっていたから「どうした」ときいくと、入学前に渡された参考書を古い電話帳と間違えて捨てたと返してきた。勉強をやりたくても、出来ないという状況だ

「じゃあ、上手く教えられるか分からないけど俺が――」

「少しよろしいっでしようか」

「ん？」

金髪ロールの女子が話し掛けてきた。この感じは、俺の嫌いな部類の人間かもしれない。

「まあ！なんで巢の、そのお返事。私に話し掛けられるだけでも光栄なのでそこからそれ相応の態度があるのではないのかしら？やはり男と言うのはみんなこうなのかしら」

訂正。まごう無き事俺の嫌いな部類だ。女尊男卑の世界に浸ってやがる。

「セシリア・・・オルコット・・・」

「セシリア・オルコット？ああ、イギリスの代表候補生の一人で入試が女子の中では主席でオルコット家の息女か。確か両親は、三年前に事故で他界しているなそのせいで、莫大な財産を相続し、一人でその財産を、金の亡者から守るために勉強し、その一環で受けたIS適正テストで『A+』を取ったエリートモドキが俺に何か？」

「あなた私を侮辱していらっしやるの？そして何所まで知っていたらしゃるのでしょうか？」

「さあな。それに知っているのは、知っていることまでだ」

「まあいいですわ。本来なら、わたくしのような人間とは、クラス

を同じくする事だけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解してただける？」

「そうかそれは良かった。しかし、たった15才で選ばれた人間気取りか恐れ入ると、織斑先生なら言うだろうな。な、一夏？」

「あ……ああ」

「何が言いたいのです？ 大体あなた、ISについて殆ど知らないくせによくこの学園に入れましたわね！」

ん？ 土音から黒いオーラが出てる……キレそうだな

「……土音、おさえろ」

「……でも！」

「いいから。……一夏、土音が暴れないようにしてくれ」

「あ、ああ分かった」

「私を無視しないで下さい！」

「無視はしてねえよ。それに、殆ど何も知らないとは心外だ。キミよりは知っているよ」

少し殺気を出してみる。

「ッ！ 何ですって？ まあいいですわ、私は、優秀ですから、あなた達のような人間のような人間にも、優しくしてあげますわよ？ IS

の事で分からない事があれば、まあ……泣いて頼まれたら教えてさし仕上げててもよくってよ？なんせわたく「……れ」はい？」

「……黙れ……」

ああ、土音がとうとうキレた……面倒臭え。

「黙れ！お前に兄さんの何が分かる！何も知らないくせに、兄さんたちを馬鹿にするな！」

「なっ。あなた！あなとこそ何を――」

「ハア……黙れよ……」

今度は、さっきの三倍の殺気を出した。

「なっ！」

「さっきからぎゃあぎゃあうるせえんだよ、それともあれか？人類誰もが自分を知っていると思っっているのか？自意識過剰だな。じゃあ聞いてみよう。このクラスの中で、入学する前から、こいつのことを知っていたという人、手を上げろ」

周りを見てみる。手を上げているのは二人だけだ。しかも同郷。

「ほら見てみろこの学園に入る前にお前を知っていた奴なんてお前の同郷以外誰も居ないんだ。分かったら、早く自分の席に戻れ。もうすぐ授業が始まる」

「くっ！この私に恥をかかせるなんて！覚えておきなさい！」

「考えとくよ、早く席にもどれ。でなきゃ・・・」

「でなきゃ何だというんですの！？」

「担任の出席簿が火を吹くぞ♪」

「へ？」

バシン！

「言わんこちゃ無い。ちなみに忠告はしたぞ？」

「織斑先生・・・何時から・・・」

「貴様が紅弟をキレさせた時からだ。早く座れ、騒ぐのは十代女子の特権だが今はあいにく、私の管轄時間だ静かにしてもらおう」

「くっ！」

話は、おわったな。さて今度は土音だが・・・

「さて、土音。さっきのことだが・・・」

「・・・」

どうやら怒られると思っているようだ・・・体をちじ込ませている。

俺は手を上げる。

「待て、神夜。士音は、お前の事を思って・・・」

「分かってる」

「へ？」

おれは士音を、優しく抱きしめた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

いつもより・・・が多い。予想外の事で混乱しているんだろう。

「ありがとうな。嬉しかったぜ？」

「・・・・・・・・・・うん・・・・・・・・・・
うっうっ・・・・・・・・」

「あ、一夏。ちょっとこいつが泣き止むまで外行ってるな？ISの授業とかで分からない事があったらティエリアに聞いてくれ、じゃあよろしくな？ティエリアも」

「ああ」

「分かった」

「織斑先生。ちょっとこいつが泣きそうなので、外行ってきます。授業は進めてください」

「ああ、分かった。ちなみにこの時間わお前が転入してきたから、

再びクラス代表を決めるのだがお前は どうする？」

「推薦されたら入れて置いてくださいするかどうかは、彼女達に任せます。では！」

士音が泣くと授業妨害になるので急いで外に出た。廊下は、走るなというのを無視して。

そして俺は中庭に出た

「ここら辺でいいかな？」

「う・・・お兄ちゃん・・・うっうっう、うわあああああああ
ああああああああん」

「ああ、大丈夫だ・・・大丈夫・・・」

暫くしたら、士音は泣き疲れたのか、眠ってしまった。

「まったく。制服が濡れちゃったじゃねえか。・・・帰るか・・・」

「う・・・ん・・・兄・・・さん」

「はいはい、此处に居るよ」

そして、俺は教室に戻った。

神夜Side off

千冬Side

やっとまた私の番が周ってきたか。かなり待ったぞ作者。

作者 「申し訳ないです。反省しております」

仕方ない、許そう。

作者 「ははあorz」

よしでは紅も出て行った事だから始めるか

「今話したとうり、紅がこのクラスに遅れて入ったため再びクラス代表を再び決める。自薦他薦は問わない、この場に居ないがもちろん紅も可だ。どうする誰か居ないか？」

「はい！ やっぱり織斑君がいいと思います！」

「はい！ 私は紅君がいいと思います！」

「うん！ やっぱりその二人だよねえ！」

「うんうん、そうそう！」

「やはり俺もなのか・・・」

「くっ！ あなた達！ 何で真っ先にその二人が出て、このわたくしの名がでませんの！」

「だって、ねえ・・・」

「オルコットさんはどうせ自分で名乗るじゃない・・・」

「ぐぬぬぬ・・・」

「それでは――」

プシュン

紅が帰ってきたようだな。それでは変わろう。

千冬Side off

神夜Side

帰る間に一組の方から黄色い声が、聞こえた。廊下まで聞こえるってドンだけだよ。他のクラスの邪魔になったりしないのか？

「只今戻りました」

「うむ、早かったな」

「大人しく寝てくれましたから。で状況は？」

「うむ、結論でいうと・・・」

「紅 神夜、織斑 一夏！決闘ですわ！」

「・・・ということだ」

「またか・・・」

神夜Side of

第三話 9／4改訂（後書き）

今回わかったこと、それは！

俺、前書きでネタバレしすぎだ

次からはネタバレしないようにします・・・。

第四話 9／4改訂（前書き）

はい、それでは前回の後書きのようにネタバレしないようにするため、この作品の主人公、紅 神夜君にきてもらいました。

神夜「来たはいいけど、俺何するか聞いてないぜ？」

ああ大丈夫。キミはただ俺がネタバレしそうになったら、止めてくれるだけでいいから。

神夜「sonだけで、いいの？」

もんだいなし。じゃあいくぜ？えっと今回は

神夜「いきなりネタバレじゃねえか！」

ドカン！！

い・・・いくら何でも殴るのは無しだ・・・ろ（ガクッ）

神夜「あ、やり過ぎた・・・まあいいやどうせすぐ生き返んだろ。

それじゃ第四話始まるぜ！！」

第四話 9／4改訂

第四話

神夜Side

「ふむ。予想としてはこうかな。まず俺と一夏が選ばれて、必ず自分の名前がでると思っていたオルコットさんは何時までたっても自分の名前じゃ出ないことに憤慨した。反面他の子達は自薦他薦問わないから、絶対に自分からは立候補しない俺と一夏を推薦し、オルコットはどうせ自分から立候補するだろうからしなかった。そしてらオルコットはさっき言ったように憤慨し、推薦された俺たちを見事撃破し、自分の力を見せ付け、クラス代表になろうと、俺たちに決闘もどきを申し込んだと。加えて、一夏自身は、クラス代表も、その決闘もどきも、面倒だから、やりたくないが、拒否権がないので、何も言えないと。こんな所かな」

「毎回思うが、その洞察力凄いな。」

「どうするんですの？受けるんですの？それとも逃げるんですの？」

「俺自身はいいけど・・・一夏は、どうする？」

「何故俺に振る？俺はあいつと昨日の時点で受けているんでな、男に二言はねえよ」

「さすが一夏！言う事が違うね。で、ハンデはどうする？」

「あ、馬鹿！」

「あら、早速お願いかしら？」

「いや。俺がどれくらいオレがどのくらいハンデ付けたら良いのかなと」

「紅君、それ本気で言ってるの？」

「もちろん」

「男が女より強かったのってISが生まれる前の話だよ？」

「確かにね」

「昨日の、織斑君と同じこといってる」

「おお、一夏。流石だ」

「織斑君と、紅君は、それは確かにISを使えるかもしれないけどそれはやっぱり言い過ぎよ」

「なんで？」

「何でって、もし男女間で戦争が起きようものなら、男陣営は三時間制圧されるって言われているんだよ？」

「それが？」

「それがって・・・」

「君達は何か、勘違いしてないかい？」

「勘違いって何？」

「所詮ISは、パワードスーツだ、使う人間の器によって、性能が全然違う。それにIS自体を作っているのは誰だ？俺たち男だよ。女はその恩恵を受けているだけだ！開発者が男なら、その開発したISの弱点だって知っているはずだ。その弱点を俺たちISを動かせる俺たちが突けば良い。それにこれからも、俺たちのような存在がでてくるはずだ。でてこないのなら自立兵器で対応すれば良い。ないなら造れば良い、そのデータはそういうことを抜かして考えたデータだ。科学は日々進歩している。なのに最新のデータがないからそんな風に考えてしまうんだ。それに代表をかけたこの決闘もどきにしたってそうだ俺たちは専用機を持っている、それに入試の試験官にも勝っているオルコットと条件は一緒だ！これで更に男が女を一方的に追い詰めるようにしないためのハンデだ。なぜ馬鹿にする？馬鹿にされる意味が分からない！」

「そうだね・・・」

「私たちが間違っていたよ」

「紅君に言われるまで気づかなかったよ」

「ごめんね・・・紅君、織斑君！」

「分かってくれたらいいよ」

「そうだよな、男はもっと自信を持って良いんだよな！」

「お前も改心する所があったのかよ」

バアンツ!!!!!!

「納得いきませんわ!」

ハア、こいつは・・・感動のシーンで空気も読めねえのかよ

「何が納得いかないんだ?」

「そもそもあなた!試験官を倒したんですの!?!」

そこかよ……………

「ああ倒したぜ」

「その猿のように自滅してじゃないですわよね」

「何所の猿かは知らんが、自分で倒したぞ」

「その試験官はどなたですの? まああなたに倒される程度の人なんでしょうけど」

「ほ「ほう、その口振だと紅の倒した試験官を自分も倒せるという感じだな、オルコット」セリフを取らないで下さい織斑先生」

織斑先生が怒ってらっしゃる。まあたかが代表候補生が自分を倒せるって言うてるんだもんな・・・まあ、つくづく大変なクラスを持ったんですね。おつかれ様です。織斑先生。こんど、マッサージチエアや酒を送りましょう

「もちろんです！で、倒した試験官は誰ですか？」

「・・・・・・・・」

「どうしたんですの？」

「良いんですか織斑先生？」

「ああ、お前の実力を知らしめてやれ」

「ハア・・・じゃあヒントだけ・・・人類最強・・・これで分かる
だろ」

そう言った途端、クラス全員が織斑先生のほうを向いた。

「ま・・・まさか・・・」

「そうだ、紅の試験官は、私だ」

オルコット終わったな。

「さてオルコット。貴様、私を倒せるんだったな」

「いえ・・・あれは言葉の綾で・・・」

「私も自分がどれだけ弱くなったか知りたいんでな、手伝ってもら
えませんか代・表・候・補・生・様」

「い、いや」

「それでは山田君後を頼んだ。いざと言うときは、紅を頼れそいつが纏めてくれるよ」

「は、はい！」

「よし、では行こうか。オルコット」

「いや~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~!!」

これであいつも懲りるだろう。

そんなことを思っていると・・・

「紅君本当なの!?!」

「本当だったら、紅君が現世界最強だよ！」

「凄いよ、このクラスに有名人の身内と、有名人が、三人も居る！」

「有名人というなら、神夜は、五年くらい前からそうだな」

「あ、ちょ、ティエリア！」

「なんせ、神夜は、あの大手株式会社『COU』の社長兼会長だからな」

「・・・ティエリア・・・それは言うなって言っただろう・・・」

「あ・・・すまない。つい自分の主人を自慢したくなったものだから」

「もう良いや・・・もう、めんどくさい」

「あの、みなさーん。席について下さーい。まだ授業中ですよー。うう紅くーん」

「ハア・・・皆席について。休み時間になったら質問に答えるから。今は授業受けて。でなきゃ・・・嫌いになっちゃうぞ？」

ガタガタン・・・シーン

おおすげえ速度。瞬時加速<イグニッション・ブースト>並じゃね？

「じゃあ山田先生お願いします。多分今日中には織斑先生、帰ってこないと思いますんで下校時間までお願いしますね？」

「あ、はい！頑張ります！では教科書10ページを開いてください・・・」

只今休み時間♪

来たぜ・・・俺に対しての質問タイム

その中の一部がこれだ・・・

1 (ONE)

2 (TWO)

3 (THREE)

「千冬様に勝ったて、本当？」

「本当だ」

「千冬様との関係は？」

「教師と生徒」

「専用機を持ってるって本当？」

「ああ」

「『COU』の社長って本当？」

「ああ、やらせてもらっている」

「あたしの専用機を作って！」

「金さえくれればいいよ」

「千冬様との馴れ初めは？」

「昨日、対戦させてもらった」

「織斑君との関係は？」

「朝、名前で呼び合うようになった。後今日から、寮部屋が同室だ」

「寮の部屋何番？」

「最上階の405号室だ」

「織斑君が受け？それとの紅君が受け？」

「残念ながら、君の想像しているような、関係ではない」

「ISの事教えてくれ」

「上手く教えられるか分からないけど俺でいいなら。後今日から寮部屋同室だから、今の部屋に帰ったら、荷物を纏めて、最上階の405号室に來い、それと、放課後の事、忘れるなよ。職員室だぞ」

「分かった405号室と、放課後職員室だな！」

と、こんな感じだった。そう言えばなんか一夏が篠ノ之さんに追いかけられてたけど・・・また変な事でもしたのか？

時は流れて・・・放課後♪

コンコン

「失礼します」

「あ、紅君。今日は、ありがとうございました」

「いえいえ。織斑先生は？」

「あ、はいこちらです」

どうやら、応接室にいるようだ。

コンコン

「織斑先生。紅君が、いらしゃいました」

《「分かりました。紅、入れ」》

「失礼します。山田先生、土音の事お願いします」

「はい、じゃあ土音君、こっちに来て下さいーい」

「・・・・・・・・はい」

その会話を聞いて、俺は、応接室に入るとそこにいたのは、険しい顔をした、織斑先生と、一夏だった・・・。

神夜Side off

第四話 9／4改訂（後書き）

心肺停止・・・・・・・・・・。
神夜「どうするかこれ・・・・。埋める？流す？」

第五話 9／4改訂（前書き）

前回、神夜に殴られて三途の川を泳いだ大神です。

神夜「悪かった」

悪かったですんだら警察要らねんだよ!!

神夜「すんまそん（笑）」

笑うなー！お前な、俺が死んだらこの話続かないんだよ？||お前らも死ぬってコトだよ？わかってる？

神夜「誠に申し訳ございません」

よし、許そう。

で今回んだけど、お前の過去を暴きます。

神夜「またネタバレだけどいいや。じゃ、第五話始まります」

第五話 9／4改訂

第五話

一夏Side

朝、言われたように放課後すぐに職員室に向かった。そういえば、
箒に部屋を代わるって言ったら木刀を持って追いかけてきた。何所
に移るのか聞かれたから神夜の所だって言ったら収まったけど・・・
何でだ？

コンコン

「失礼します」

「きたか、織斑ではついて来い。山田君、紅が来たら応接室に通し
てくれ」

「解かりました」

そうして俺と千冬姉は、応接室に入った。

「一夏、真面目な話だ。ちゃんと聞いて欲しい」

千冬姉が学校で俺の事を、『一夏』と呼ぶときは、本当に大事な時
だ。

「これを読め」

千冬姉は俺に一通の手紙を渡した。

「これは？」

「紅が持って来てくれた。私達の両親、父さんと、母さんの遺書だ・
・」

「なに！」

「筆跡鑑定で、一致した。紛れもない、母さんの書いたものだ」

俺はすぐに封筒から手紙を出した

その内容は・・・

作者 「手紙の内容は、第二話を見てね！」

「・・・千冬姉・・・これ、本当に、母さんの書いた物なのか？」

「ああ」

「じゃあこの『紅一家の方達に任せてあります』ってどういうこと
だ？」

「それは《コンコン》その紅一家の者に聞いてみる」

紅一家？神夜達の事か。

《「織斑先生。紅君がいらっしやいました」》

「わかりました。紅、入れ」

《「失礼します。山田先生、士音の事お願いします」》

《「はい、じゃあ士音君、こっちに来て下さいーい」》

《「・・・・・・・・はい」》

そして、神夜とティエリアが入ってきた。

一夏Side off

神夜Side

俺が入ると、一夏と千冬さんが、座っていた。兄弟仲よく横一列に。

「おう、一夏もう来てたのか。おっ、織斑先生、オルコットとは、どうなりました？あのあー「神夜」・・・・気晴らしにはならないみたいだな・・・・」

「神夜、率直に聞く。この『紅一家の人に任せてあります』ってどういうことだ？」

「織斑先生まだ言ってなかったんですか？」

「ちょうどいいタイミングでお前が来たからな」

「そうですか・・・・。一夏、お前も粗方気付いているだろうが、はつきり言う。お前ら俺の家族になれ」

「やっぱりか・・・・」

「ああ。その遺書にも書いてあるように、この申し出を受けるかどうかはお前ら二人の自由だ。織斑先生自身は、お前に決定権を譲るようだがな。」

「千冬姉・・・」

「・・・・・・・・」

一夏が不安そうな声で、織斑先生を見るが俺は気にせず続ける。

「もちろん、この申し出を受けた時のメリットもある」

「メリット？」

「ああ、先ず第一にお前ら二人の安全の確保。おまえら二人が危険な目に会いそうになったら、オレの雇っている国家代表クラスのIS保持者が、助けに行く。第二に、衣食住の完全確保。俺たちの住んでいる家に移ってもいいし、今お前らの住んでいる家を改装しても良い。第三に、仕事場の確保だ。まあウチの会社のテストパイロットだな。織斑先生は第一回モンドグロossoを優勝しているから、IS適正もいいはずだし。一夏は、これからのためにも役立つ。そして最後に織斑先生の負担の皆無化だ。一夏の養育費も俺が持ち、二人の老後も俺達が面倒を見よう。後、一夏の相手探しも。どうだこれで、まだ何かあったら言ってくれ。出来る限りの事はやってみる」

「一つ聞かせてくれ」

此処まで黙っていた、織斑先生がやっと此処で口を開いた

「なんですか？」

「何故私達のためにここまでしてくれる？」

「そうだ、俺もそれを聞きたい！」

「似ているから・・・・・・・・ですかね」

「似ている？」

「少し長いですが、昔話をしましょう」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「とあるところに、ある男の子がいました。その男の子は一歳のときから一人でした。あるのは自分の体と、たった一年くらい一緒に過ごした両親の顔の記憶と自分の名前だけ。他には何もない。一般的には必要不可欠な両親さえ居ない。男の子はそれでも、泣かなかった。いや、逆に笑っていた。自分が何故捨てられたのか、わからなかったからだ。人間、脳が目の中の現実を追いつかなかったら何故か笑ってしまうというそれだ。それから一年後の雨の振っているある日男の子は捨てられてから初めて泣いた。脳がやっと現実を追いついた瞬間だった。男の子は泣いた。泣いて、泣いて、泣いた。それはもう、涙が枯れる位に、涙腺が壊れる位に泣いた。二日間泣き通した。うる覚えな両親の名前を叫びながら。そのときの天気は、彼の心情の様だった。そして、一年間気付かなかった空腹で目の前が真っ白になり、男の子は倒れた。本能的に何か食べようとした。だが、彼の周りには人は愚か、食料なんて無い。自分の周りにある

のは雑草だけ。そう雑草だけ。男の子は一番手元にあった雑草を抜いて食べた。美味しくないはずの雑草は、彼には最高のご馳走に思えた。ただの雑草が。何所にでも、何所にでも生えている雑草が。彼にとってのご馳走をおなかいっぱい食べた男の子は、わずかな記憶をたどって歩き出しました。来る日も来る日も彼はご馳走を食べた。町を移り、川を泳ぎ、山を上り、両親を探した。十歳になった彼はとある家の前で倒れた八年間歩き通して体も心もボロボロになり、力尽きて、倒れて仕舞ったのだ。倒れた瞬間その男の子は、意識を手放した。意識が回復した時、男の子は知らないところに居た。そこは真っ白な空間だった。男の子を囲っていたのは、純白のカーテンだと分かった時カーテンが開いた開けたのは、男の子を拾った、とある夫婦だった。その夫婦は、紅と名乗った。男の子は、上の名前が、わからなかったもので、下の名前だけ名乗った。そして、家の前に倒れていた経緯を話した。男の子は全てを話した。1ビットも美化せず、風化もせず自分の見てきた事を話した。話し終わると紅夫婦から、自分達の子どもにならないかと言う申し出があった。しかし、男の子は一度断った。自分が、この幸せそうな夫婦に災厄をもたらすかもしれないと考えたからだ。しかし、夫婦はそんなの気にしない災厄が生まれるのなら、三人で、災幸に変化させようと言った。男の子はその言葉を聞いて泣いた。それまで感じた事の無い人の温もりと言うものを知った。そして彼は、紅夫婦の申し出を受けた。それから生活は、楽しかった。紅家に笑いが堪えなかった。男の子が紅家の一員になって半年後彼らにもう1人家族が増える事になった。男の子は心から喜んだ。少しでもお兄ちゃんぽくなる。少しでも両親の負担を軽減しよう。実の兄じゃなくても、実の兄のように、いやそれ以上になろうと勉強を始めた。紅夫婦もそれを喜んだ。そして終には『COU』と言う会社まで建ててしまった。くれない夫婦も「よくやった」「頑張ったね。あなたは、自慢の息子よ」とまで言ってくれた。男の子も喜んだ。そしてその二ヵ月後男の子に弟が生まれた。馴れない手つきで弟を抱いたら、

「こうするのよ」と母が教えてくれた。男の子は、泣いて喜んだ。これが、家族の愛なんだと分かった瞬間だった。男の子の弟が1歳になった年の勤労感謝の日、男の子は、両親に、旅行のチケットを渡した。引き取られて、初めてしたプレゼントだった。母親は余りの感動で泣き崩れてしまい、父親は何も言わず、ただ、男の子の頭を優しく撫でていた男の子は、恥ずかしかったが渡してよかったと思った。そして両親は、次の結婚記念日に必ず行くと約束してくれた。次の日、男の子は、自分の建てた会社の勤務が終わり、帰る途中に、あるものを見つけたそれは、自分が拾われた時のように倒れている二人の男女だった」

「それが・・・・・・・・・・」

「俺達の親・・・・・・・・・・」

神夜 「・・・・・・・・・・（コク）。・・・男の子は自分を拾ってくれた両親が自分にしたように病院へ連絡しようとした。しかし、目の前にいる女性が「病院へは連絡しないで」と言ったので仕方なくその二人を自分の家へ連れて行った。その二日後、男女は目を覚まし、何故あんな所で倒れた経過と、結果を話した。自分達に娘と息子がいること。自分達は身体能力と治癒能力が常人より優れている事。ドイツのとある研究所が自分達を狙っている事。そのために自分の子どもを捨てた事。そこまで聞いて、男の子は憤慨した。そこにいる誰よりも捨てられる苦しみを知っているからだ。そしてその男女は反省した。自分のした過ちを心から反省した。そして、自分達の命がもう後少ししかない事を話した。男の子は、直接離せないならせめて手紙でも書いてあげてと言った。それだけでも心は伝わる事を男の子は知っていた。そしてその十日後第一回、モンド・グロッソが開催された。その出場者の中に一際目立つ日本の女性が居た。男女は、その女性を自分の娘だ、と言った。その女性ほぼ一撃で

対戦相手を沈めて行った。そしてその女性はどうとう決勝戦にまで上り詰めた。そして、男女は男の子に自分達の書いた手紙を渡した。「あなたの方が私達より早く出会うでしょうから」といって。男の子が男女から手紙を受け取った瞬間、日本代表の女性が優勝した。まるでそのタイミングを窺っていたかのように。そしてすぐに表彰式が始まった。一位の女性がメダルを表彰される時、男女は仲良く一緒に息を引き取った。愛する娘の晴れ舞台を見て。・・・・・・それからいろいろあって男の子は少年になり今此処に居る」

「そんな事が・・・」

「・・・・・・ありがとう、神夜。俺達のクソ親父と馬鹿お袋を拾ってくれて」

「実の父親と母親をクソとか、馬鹿とか言うのは感心しないな。一夏君？」

ちよつと笑顔で、殺気を出してみる。

「お、おう・・・・。そう言えばお前の義理の両親のその後の話がなかったが、どうしたんだ？」

「ッ！・・・・・・それは、またの機会だな・・・・」

「馬鹿めが・・・・・・」

「？」

「で、どうする？俺達の所に来るか、来ないか。もちろん行かないで、養育費だけ受け取るってのも有りだ。俺的には来てくれた方が

嬉しい。土音の遊び相手も出来るし、その方が守りやすいし、ISの事も教えやすい。どうする、一夏、織斑先生がお前に決定権を譲った今、織斑先生の将来を決めるのはお前だ。お前次第で織斑先生の今後が決まる。」

「な・・・なんか壮大な話になってきたな・・・」

「最初からそうだ馬鹿者」

「うーん。俺の一存で千冬姉の将来が決まる・・・。。ん？将来？まさか・・・俺たちが行ったら、千冬姉と神夜が、けk」

「「お前が考えてる事は絶対に無いから安心しろ」」

「なんだ、やっと千冬姉に相手が出来ると思ったのに」

「「先ずお前が相手を作れ。例えば、篠ノ之^{さん}とか」」

「なんでそこで箒の名前が出て来るんだよ！」

「まあ、ホントの事は置いといて・・・」

「訂正するつもりは無いんだな・・・」

「どうする？別に今日じゃなくても良いんだが。でも、出来るだけ早く決めてくれ」

「いや、今日決める」

「・・・。。そうか。まだ条件の追加が欲しいなら返事と共に行

っ
てくれ。さつきも言ったが、出来る限りの事はやってみる」

「………決めた。俺達は――――
お前の家族になる！」

神夜Side off

第五話 9／4改訂（後書き）

おー。神夜良かったな。家族が増えたぞ！

神夜「ああ、良かったことは良かったんだが紅 一夏、紅 千冬って、語呂悪くない？」

ふふふ・・・そこを何とかするのがこの私、大神こと、作者だ！

神夜「へー。じゃあ次は第六話楽しみにしてるよ？ ばいばーい」

勝手に終わりにすんなよ！ あれ？ 終わり？ マジで？ うーそーだー！

第六話（前書き）

天叢雲さんから感想をいただき、今までの投稿してきた話を改訂させていただきました。天叢雲さんご意見ありがとうございました。神夜「ありがとうございます」

これからも投稿を続けていくつもりなので、これからも応援よろしくお願いします。

第六話

第六話

神夜Side

「…………決めた。俺達はお前の家族になる！」

「そうか……それでいいですか、織斑先生？」

「私は決定権を一夏に譲ったんだ、一夏の決めた事に反論は出来ん」

「そうですか……。一夏、決めた理由は？」

「そうだな……。まあ、好条件ってのもあったけど、やっぱり一番なのは、神夜の事をもっと知りたいからかな。」

「俺の事をもっと知る……………」

「ああ。せっかく同じISを動かせる男だからな！もっと知りたいんだよ！」

「そうか……。俺の事をもっと知る……。か。これは予想より早く言う事になるかもな（ボソツ）」

「ところで、神夜。俺たちはこれから、紅って名乗った方がいいのか？」

「いや、今までどうり織斑でいい。紅のほうは、都合のいい時だけ名乗ればいい。まあ織斑の名もいまや世界中に広がっているから使

うときは少ないがな。むしろ俺が織斑を名乗ってもいい」

「それは止めてくれ、クラスの皆が五月蠅そうだ」

「それもそうだな。土音も余り他人が好きじゃないしな」

「そうなのか？それだったら俺たち家族にならないほうが良かったんじゃないか？」

「土音には、言ったのか？」

「それだったら大丈夫。土音は織斑姉弟のファンだからな」

「「ファン!？」」

「ああ、なんか織斑先生が戦っている姿が好きなんだって。まあクラスの女子ほど崇拜してないけど。一夏からは、織斑先生ほどではないけど剣士の強さを感じるんだて」

「…………一夏に剣士の強さ、か。確かに有りそうだ。だが、馬鹿さのほうが多いな」

「千冬姉もつと認めてくれても罰当らねえと思うけど」

「当たりはしないだろうがお前が付け上がる」

ふ……織斑先生と一夏、仲いいな。やっばこうしてみると仲のいい姉弟だよな

「ぐ……………?」

「どうした。いち・・・か？」

一夏と織斑先生が俺の顔を見て不思議そうな顔をする

「神夜、お前どうした？」

「どうしたって何が？」

「何故泣いているんだ？」

へ？泣いてる？俺が？なんかの間違いじゃね？

そう思って、目元をさわると濡れている・・・

「あれ？ホントだ。何でだ？何で俺泣いてんだ？やべえな、止んねえ。どうしよう。てかどうしてだ？一夏、お前、俺になんかしただろ。何しやがった。百倍返しにして返してやるから教えろ」

「何で俺がやった事になってんだよ！しかも百倍返しって！」

「紅家家訓その100やられたら百倍にして返せ。それにやった事になってるのは、この場にやるのがお前以外に居ないからだ」

「理不尽だ!!」

「世の中はいつも理不尽だ」

「紅、お前が泣いたのは、感動したからだ」

「かん・・・・・・・・どう？」

「そう、感動だ」

「感動ってなんですか？」

「知らないのか？」

一夏はまたもや不思議そうな顔をした

「お前はさっきの話を聞いてなかったのか？こいつは、物心付いた頃には一人だったんだ私達を基準にして考えるな。親が居なかったんだから感情が一部欠陥しているんだ。その分私達は幸せな部類だ。」

「そ、そうか・・・ごめん神夜」

「いやいい。それより感動ってなんですか？分かるかティエリア？」

「（久しぶりの出番だ・・・）ああ、『ヴェーダ』によると、深く物に感じて心を動かす事、だ。例えば、名画に感動するなどだ」

「具体的に言えば？」

「そうだな・・・例えば・・・土音が生まれて泣いて喜んだろ？」

「ああ」

「じゃあそれだ。家族愛と言うのも有ったはずだが、感動もあった

はずだ」

「そうか・・・あれが感動・・・」

「よし。じゃあ神夜画またひとつ覚えたところで今日はもう、寮に帰りますか。そろそろ行かないと食堂も閉まる頃だし。」

「お前も大概感動のシーンを壊すな」

「まじで！？じゃあ一夏、俺と土音先に言ってるから！織斑先生ほか書類とかの事はまた今度先生の時間があいている時にでも呼び出してください。じゃ！」

そうして俺は応接室を出た。

「山田先生、土音の事ありがとうございました」

「いえ、土音君すぐ寝ちゃったのでそれほど大変じゃありません出ましたよ」

「そうですか。これからも土音の事お願いする時があるかもしれませんが、そのときはどうぞよろしくお願いします」

「はい」

「それじゃあ自分達はこれで。一夏に部屋鍵渡しといて下さいね？」

「はい。まっすぐ帰るんですよー。また明日ー」

「はい、また明日」

俺はティエリアを肩、土音を背中に乗せて、一直線に食堂に向かった。

神夜Side off

一夏Side

「ハハッ！やっぱあいつ、兄貴肌ってやつだな、ちゃんと土音の兄貴やってるよ」

「ああ、だから私は決定権をお前に譲ったんだ。私自身は奴とであった日から、ああこいつなら私達を任せられると思ったからな。後はお前がたった一日であいつをどう見るかが知りたかった。だから譲ったんだ」

「これも千冬姉の試練だったと」

「ああ、だが家族の件は本当だがな」

「それは分かってるよ。じゃあ俺もそろそろいくね。織斑先生？」

「ああ。寄り道するなよ劣等生？」

「分かりましたそれじゃまた明日」

「遅刻するなよ」

そうして俺も応接室を出た。

「あ、織斑君！織斑君！」

応接室から出たら山田先生に呼ばれた。

「何ですか山田先生？」

「はい、紅君から聞いてるかもしれないけど今日から紅君と同室です。これで、新しい部屋のかぎです。4005号室ですよ。今までののは明日返してください」

「分かりましたではこれで。食堂閉まっちゃうといけないので」

「はい。ではまた明日ー」

そして俺は食堂を目指した。

しかし――

張り紙「食堂本日営業終了」

「終わった……。しょうがない。今日の夕食はあきらめて早く荷物まとめて神夜ん所行こう……」

そして俺はたったの一日寝泊りした1025号室に、入っていく。

一応、箒が着替え中じゃないことを確かめるためにノックをして・

コンコン

「誰だ」

「俺だよ。一夏だよ。一応聞いとくが着替えてたりしないよな？」

「一夏！？あ、ああ、今寝ようとしてた所だ」

「それなら良かった。荷物を取りたいんだが開けてもいいか？」

「あ、ああ」

「そっか。じゃあ失礼しますよっと」

俺が部屋に入ると箒が迎えてくれた。

「本当に行ってしまうのか？」

「ああ」

俺は自分の荷物を纏めながら、箒の質問に答える。

よし終わった。箒の睡眠の邪魔になるだろうから早めに退散するか。

「じゃあ箒、俺はもう行くから」

「あ、ああ………」

「じゃあなまた明日」

「また……明日……」

そうしておれは1025号室を出た。

そしてただいま、4005号室の前に居る

「あれ？なんか良い匂いが・・・」

なんかホントすげえいい匂いがする・・・どっかで料理でもしてんのかな？嫌でもこの階には4005号室しかないんだよね・・・もしかしして！

俺はある希望を胸に4005号室に、入った。

「神夜！この匂いまさか！」

「おお、一夏帰ってきたか。飯有るぞ？」

「おお、ウマソー。じゃ無くてなんでここに食材があるんだよ！？」

「ん？ああ、俺達が食堂行ったらもう閉まる寸前だったから食堂のおばさんに頼んで食材を一部買い取らせてもらったんだよ。で、俺も土音も食ってないからお前のやつを作るついでに俺たちの作ってんの。買ってきても良かったんだけどおばさん達も大変だろうし何より作りたてのほうがいいだろ？てことで俺が夕食作っとくからお前は土音とシャワー浴びてきてくれ。これは家長からの命令だ。分かったらすぐ入る」

「おお、ありがとう。じゃあ土音」

「・・・・・・・・はい！」

「ああ、後、織斑先生や、山田先生にも連絡しておいてくれ。酒と

つまみ有りますよって」

「了解。（何で酒が有るのかは、ツツコま無い）」

神夜 「チッ」

「じゃあ土音。男同士、友情を深めようぜ！（舌打ちしたって事はツツコんで欲しかったんだな）」

「なにいつてるんだ？一夏。土音は女だぞ？」

「は！？嘘付け！今朝弟だって・・・はっ！（クソ、ツツコんでしまった）」

「ふ、一夏。今日は俺の勝ちだな。負けた一夏君は、今日の夕食ボツシュートです！」

「おいおいおいおい！お前は俺を殺す気か！？」

「・・・・・・・・兄さん・・・僕は男です。それに一夏お兄ちゃんを殺さないで上げて下さい」

「土音・・・」

「・・・・・・・・兄さんが人殺しになってしまいます」

「俺の為じゃない！？」

「大丈夫だ、土音。ばれなきゃ問題ない」

「大有りだ!」

「……………そうなんですか」

「納得するな!」

「……………冗談です」

「そうだぞー、一夏あんまり本気にすんなー。それより早く風呂は行って来いよ」

「ハア……………わかった。行くぞ士音」

「……………はい」

一夏Side off

神夜Side

「行ったか……………さて織斑先生のおつまみどうしよう……………市販のやつじゃ納得いかないだろうし、そうだ、この肉で簡単な燻製でも作ろう」

殆ど棒状の肉に胡椒、ブラックペッパー、白ワイン、シナモンを適量加えてオーブンに入れる。十分ほど温めたら今度はフライパンで焦げ目が付くくらいいためる。これで完成だ。

コンコン

「お、織斑先生が来たな。はいはい、今開けまーす」

ドアを開けたら、居たのは……………酒飲み教師だった。後、その後

ろに元書類オバケも居た

「酒飲み教師とは何事だ」

「オバケじゃないですよー」

「地の文を読まないで下さいとは言いません。ですが、酒に釣られてきたのに酒飲み教師を否定しないで下さい。山田先生についてはすみません今度何かおごりましょう」

「別に・・・酒に釣られたわけではない。食堂が空いてなくて困っているときにちょうどメールが来たから夕食を貰いに来たんだ・・・」

「い、いえ別にそう言う意味では・・・」

「なら、織斑先生はビール無しですね。せっかく、プレミアムモル〇から、麒麟〇、エビ〇、その他色々持ってきたのに・・・。後燻製も作ったのに・・・。ああ後、山田先生には、明日弁当を作ってくださいましう」

「ごめんなさい。嘘つきました。正直、酒というキーワードに釣られて来ました」

「あ・・・ありがとうございます／＼／＼／＼」

織斑先生は土下座、山田先生は顔を紅潮させている

ガラッ

お、一夏達が上がったみたいだな。

「神夜、上がったぜー。って何やってんだ」

「おう、いやなに織斑先生に自分の罪を数えさせていただけだ。後山田先生に明日弁当作るって約束したただけだ」

「どうしてそれだけでこうなるんだ・・・」

「まあ細かい事はおいといて早く飯食おうぜ。土音、グラス五つ用意」

「・・・・・・・・分かった」

「一夏、織斑先生、山田先生は席についてて」

「ああ」

「はい」

「ああ。・・・紅、頼みが有るんだが・・・」

「分かってますよ、ビールでしょ？」

「!?!? それじゃあ!」

「はい、どうぞ」

その夜、織斑先生が酔いつぶれるまで、夕食会は続いた。（その際にオレの特技、趣味も一緒に話した。）
こうして俺たちの学園生活二日目が閉じたのだった。

第六話（後書き）

ほら、前回言ったようにどうにかなっただろ？

神夜「まあな。でも戸籍はどうするんだよ。そこはさすがに紅一夏、千冬にするんだろう？でなきゃ財務省の奴らにとにかく言われるぜ？」

そこはお前の腕の見せ所だ。得意のハッキングで何とかしろ。

神夜「結局、人任せか・・・いいだろうやってやる！」
任せたよ。ではではノシ

第七話（前書き）

はいゝろくわで二日間が終わるという意味があるのかわからない長い文を書き終えて、三日目デース。

神夜「なんか自虐的になってないか？」

気のせい気のせい。外が暑くて誰に向けていいのかわからない怒りを持っていて自虐的になっているなんて気のせい気のせい。

神夜「なっているんだな。まあいいそれではIS～神の名のIS～第七話始まるぜ」

我思う

今年の天気

異常すぎ

神夜「短歌か・・・」

第七話

第七話

神夜Side

一夏が俺たちの家族になり、部屋も同じになった翌日の今日のSHRの後、織斑先生から

「織斑、お前のISだが国と、とある企業が用意すると言っているんだが、どうする？」

という質問があった。もちろんとある企業とは皆さんが予想しているように・・・

「神夜、とある企業ってもしかして・・・」

「ああ、俺の会社だ。ちなみに国が要請する会社は倉持技研といってIS量産は日本二位だが安全性が高い。それゆえに生産を頼まれる事が多いから優先されると恨まれる事も多い。俺の意見としては止めた方が良い。現に、四組の代表が倉持技研に要請しているという情報が有る。その子から恨まれたいと言うなら話は別だがな」

「でもそれは優先されたらの話だろう。されるかどうかは分からないだろ」

「お前馬鹿か！？馬鹿だろ！？馬鹿なんだろう！？」

「五月蠅えよ。耳元で馬鹿馬鹿言うな！」

「言いたくもなるわ！お前自分の立場分かってねえだろ！！」

「何だよ俺の立場って！」

「……………織斑先生、頭痛薬と胃薬飲んでいいですか？」

「すまない……飲みすぎるなよ」

「ハア……………一夏、お前なんで此処にいる？何で連れてこられた？」

「何でって俺が世界で初めてISを動かしたから……あ！」

「分かったようだな。そう、お前は世界にとって貴重な人物なんだよ。まあ、言わば実験動物^{モルモット}だな。その実験動物^{モルモット}のデータが世界中はいち早く欲しい。この国だってそうだ。せっかく自分の国から男性IS操縦者が出たんだ。早く、他国を追い抜きたいから、解剖してでもデータが欲しいに決まってる。だから確実にお前を優先すんだよ、分かったかこんチクショウ俺が胃潰瘍になったらお前のせいだ馬鹿野郎」

「すまん……」

「分かったらさっさと決めろ。こっちにもあちらにもやる事が有るんだ」

「ちなみに『COU』は、何の能力が高いんだ？」

「一応、全高能力^{オールラウンダー}を売りにしている」

「安全性は倉持技研が特化しているだけあって、倉持よりは低いが、

それなりに有る。攻撃力、防御力、使いやすさ、機動力、S・E共
に一流だと言って良いだろう

「うちの整備・製造班は腕がいいからな」

「へ」

「で、結局どうするんだ？早くしないと締め切って、紅と生身で戦わせるぞ」

「それは勘弁・・・えっとじゃあ『COU』ので。恨まれるの嫌だし」

「わかった。・・・紅」

「分かってます。じゃあ俺四日間授業に参加しないんで、当てないで下さい。当てても良いですけどその分、一夏のISの開発が遅れるんでそのつもりで」

そうやって俺はISの設計をするため、自分のノートパソコンを取り出した。

「おい神夜。授業に参加しないってどう言うことだよ」

「文字通り。お前のISの設計、製作をするため授業に参加しないってことだよ。まあ安心しろ今日だけは此処にいてやるから」

「そうじゃねえよ。お前他の教科は良いとしてもISの授業は受けなきゃダメだろう」

「織斑。こいつを自分と同じにするな。もはや人とは思わなくて良い」

「先生、それは酷いです」

俺はパソコンを操作しながら織斑先生に反論する。

「ホントの事だろうが。二時間掛かったとしてもこの私を倒した、それだけでも人外なのに、たった二時間で私の息を切れさせ、ずっと私を翻弄してたじゃないか。しかも当の本人は息を切らしてない。私が言えた事じゃないが化け物じゃないか。それに加え、特技が完全記憶、平行思考。それじゃまるで・・・私がひよこじゃないか」

「じゃあ俺たちは蟻か？」

「いや、一夏だけミジンコだ。（えっとこれをこうして・・・武器は・・・刀の方がいいな・・・オルコットには不利だが、そこは練習の仕方によって変わるから良いだろ・・・そうだ俺の居ない間の練習のメニューも考えなくては・・・武器の名前とワンオフ・アビリティーの名前は織斑先生と同じで良いだろう・・・そうだメニュー・・・うーん）」

パソコンを弄くりながら言う

「酷くね!？」

「織斑先生、いくつか質問して良いですか？」

「無視!？」

「うるさい。で、何だ？」

「織斑先生のIS、暮桜の事ですが、武器とワンオフ・アビリティーの名前を教えて下さい」

「ああ、武器は雪片、ワンオフ・アビリティーは零落白夜だ。まさかお前・・・」

「分かりました。最後なんですがこれから一週間、六時以降開けてもらえますか？」

「ああそれくらいなら大丈夫だと思うが」

「ありがとうございます。篠ノ之さんは、四時から五時半まで空いてる？」

「あ・・・ああ。空いてはいるが・・・。何をするんだ？」

「・・・・・・・・・・よし。ティエリア、このデータを表示してくれ」

「分かった」

「おい、紅私は貴様の質問に答えたんだ、貴様も私の質問に答えろ！」

「篠ノ之落ち着け、今のこいつには私たちの関係ない声なんか聞かえていない」

「何故ですか！？質問に答えさせたら、質問に答えるそれが普通じ

やないんですか!？」

「だからこいつに普通なんか求めるな。今のこいつは恐らく二十個以上の思考を駆使している」

「織斑教諭、違うな。神夜は今、四十の思考を駆使している」

「そうか訂正しなければな」

「そ・・・そんなことが人間にできるのですか？」

「無理に決まってますわ!」

「だからこいつは人間ではない」

「篠ノ之とやらさっきの君の質問の答えを出すぞ」

「なんだと?・・・これは!？」

そこに出たのは一夏特訓メニューだった

8..00 登校

←

8..30 S H R

←

8..35 授業開始

←

15..30 授業終了

←

16..00 H R

← 16..10 篠ノ之と、剣道場で打ち合い

← 16..35 篠ノ之と、剣道場で基礎練習

← 16..45 篠ノ之と、剣道場で木刀での打ち込み（篠ノ之..突きのみ 一夏..防具、木刀なし。回避のみ）

← 17..30 休憩

← 18..00 織斑先生の特別補習授業その1 イグニッション・ブースト 瞬時加速

← 18..30 織斑先生の特別補習授業その2 織斑流戦闘術講座

← 19..00 織斑先生の特別補習授業その3 織斑先生との対戦

← 19..50 終了

とこんな内容だ

「これは.....」

「これがさっきの君への神夜なりの返答だ」

「織斑先生この時間帯でお願いします」

「まあこのくらいの時間なら何とかなるだろう」

「一夏、このトレーニングメニューを欠かさずやれ。異論は認めん。無駄なくやればオルコットにも勝てるはずだ（S・Eは1000で・

「……………」

「お……おお」

「よし。（スペックはどうするか……機動力を一番あげるとして……）」

「しかし、タッピング速いな。壊れないのか？」

「……………このパソコンは市販のものじゃないですから」

「このパソコンは『COU』が神夜だけのために作った代物だからな。ちなみにこのパソコン自体にS・Eが張ってあるからISで叩いても壊れないんだ。S・E値は確か1000000だったな」

「高!！」

「どうしたらそんなに出来るんだ」

「企業秘密だな」

「……………秘密です」

「……………（装甲素材は……Eカーボンで良いか……コアは従来のもので良いな……いや、『あの変態』の人に預かったコアを使うか……なら解析もしなければな……）」

「あなた、イギリスに来ませんか？あなたほどの腕ならわたくしの祖国も歓迎しますわ。まあそうですね、住む場所ならわたくし

が用意してあげても良いですわよ？何せわたくしはイギリス代表候補生なのですから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（色は・・・白でいいか・・・名称・・・白・・・白騎士・・・しろしき・・・びやくしき白式・・・世代は・・・『あの変態』の人から教えてもらった技術を部分的に載せてみるか・・・載せるのは、ばれない程度で武器に・・・）」

「あなた！聞いているのですか！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（刀以外に何か武装をつけるか？・・・いや、一夏の性格上一つの事を極めた方がいいだろう・・・だがそれでは折れたときはどうする・・・いや折れる事は先ず無いんだが一応付けといた方がいいかも・・・ならどうする・・・踵の方にでも隠れブレードを出しておくか・・・いや・・・やめて置こう変にスペックが下がったら会社の存続に関わるし、なにより一夏が大変な事になる・・・）」

「ここまで侮辱されたのは二度目ですわ・・・」

「オルコット、貴様私の話を聞いてなかったのか？今のこいつには必要事項以外聞こえていない。そう言ったはずだ」

「聞いていなかった訳ではありませんわ！しかし先程その方と話していたので話せると踏んでこの状況に在るんですわ！」

「だからそれが話を聞いていないと言うんだ。私は必要事項以外聞こえていないといったんだ。織斑との会話はこいつがそれを必要事項と感じたから話していたんだ！現にその間もパソコンから目を放していなかっただろうが！」

「ぐ……それは……そうですが……」

「……（さて、大部分は終わったな。次は……能力は……スキル要らないな。だとしたら……後は設計図を書くだけだな……ん？なんか騒がしい。なんだ？）織斑先生？」

「ん？どうした？また何か質問か？」

「いえ、スペック設定の方は終わったんで、思考を大分減らしたら、なんかクラスが騒がしかったのでどうしたのかと……」

「もうスペックの方おわたったのか……。いやなにオルコットがお前をイギリスに勧誘しようとしてたんでな」

「先生、俺が平行思考使うと周りが聞こえなくなるのは……」

「伝えた。しかしお前が織斑と話しているとき平行思考を切ったと思っただらしくてな」

「そうですか……。オルコット嬢、勧誘ありがとう」

「それでは!……」

「しかしキミのような人間のいる国には移りたくないんでね。お断りするよ」

「わたくしの祖国を侮辱するんですの!？それにこの国だってわたくしのような人間はいるでしょう!？」

「やっぱりキミは何か勘違いしてない？今俺が言ったのは一昨日君が一夏に言った言葉についてだよ」

「わたくしが言った言葉？」

分かってねえみたいだし、ヒントだしてやるか。

「そう、キミが言った言葉だよ。一夏によると、キミはこの日本という国を『極東の島国』だの『文化としても後進的な国』だの『未開の地』だの『テレビが無い』だの好き勝手言ってくれたらしいじゃねえか、ああ？」

「それがどうしたんですの？極東の島国で未開の地で文化としても後進的な国。本当の事なのでしょう？まあテレビは在るようですが」

このアマ、まだ分かんねえのか？

「それがどうしただあ？ふざけてんのか！てめえは一夏よりISの事を知らないようだな！」

「な！・・・この私がその猿よりISを知らないですって！？」

そうだろうが！

「ならば聞くがISの創造者何所の国の誰だ！？テメエの言う所の極東の島国の未開の地の猿だろうよ！その未開の地の猿の作ったものを解析も出来ない国のヤツらはその未開の地の猿以下のクズだな！それに極東の島国だあ？それはテメエから見ただろうが！それに極東つってもどうせ自分の国に帰ってくるのを知らねえのか？テメエのトコも島国だろうよ！」

「そ．．．それは．．．」

「何だ？まだ何かあるのか？だったら言ってみろ！この「神夜、それまでだ」．．．すまんティエリア熱くなりすぎた」

「気を付けろ」

「．．．．．ああ」

「お前は早く一夏のＩＳの設計図を仕上げろ。明日朝一番で出なければ間に合わないぞ」

「そうだな。じゃあ織斑先生。俺はまた再会しますんで、授業始めちゃって下さい」

そこまで言って俺はまた自分のノートパソコンに意識を集中させる

「そうだな．．．。山田先生！」

「は、はい」

「私もくれないの設計の仕方が気になるからこの授業は先生に任せたいのですが良いですか？」

「はい！」

「．．．．．山田先生少しは否定というものを覚えたらどうでしょう」

「まだ開始しないのか？」

「いえ直ぐやります。突っ込まないといけないよ……うな……
気が……して（よし！では始めるぞ！）……」
「」

「（思考の海に）沈んだか……では山田先生」

「はい！では皆さん教科書19ページを開いてください」

こうして学園生活二日目が終わった。

神夜Side off

第七話（後書き）

はい、一夏の専用機お前が用意することにしたぞ

神夜「おいおい」

せめて外見は原作と同じにしるよ

神夜「装甲がEカーボンで、俺にガンダムを作れと？」

いやただ面白全開で……

神夜「半分じゃねえのかよ!？」

半分じゃ俺は動かねえよ。全開じゃねえと。

神夜「まあいいや。じゃあ次回またあいましょう」

最近お前がしめるようになったな。

第八話（前書き）

はい、今回からセシリア戦です。それについて神夜君、一言どうぞ！
神夜「どうぞつってもなあ。変なこと言ってもネタバレになるから、
まあ楽しんでくれ！」

楽しんで下さい。では、第八話始まります！

第八話

第八話

セシリア戦当日・・・・・・・・
神夜Side

「さて、一夏。先ずお前から戦うわけなんだが・・・勝て」

「おいおい、簡単に言うなよ！そこは普通『勝てるか？』って言う所じゃねえのか！？」

「普通はな。だが俺は、普通じゃない」

「・・・自分で言うかそれ・・・」

「それに俺はお前が勝てるか、勝てないかには興味は無い。そんなの過程に過ぎん。俺が興味あるのはお前の勝利——結果だ。結果がよければその過程に問題があっても俺は余り何も言わん。まあ反対に結果が悪くても過程がよくても余り何も言わん。・・・・・・・・・・
・しかし、結果が悪くて、過程も悪かった時・・・・・・・・・・覚悟しろよ？」

「お、おお・・・・・・・・・・が、頑張るぜ・・・・・・・・・・」

フフフフフ・・・・・・・・・・！これは楽しめそうだ・・・・・・・・・・！結局俺一週間徹夜したし・・・・・・・・・・。

え？何があったて？それはねー、なんかまた、兎耳の不思議の国のアリスがやってきて、「私もいつくんのIS造るー」とか言って乱入したのが原因だな、確実に。いつくんてのは一夏だろうから一夏

の知り合いかな。

ん？一夏のISどうしたって？ちゃんと持ってきたよ？朝。まあ、そのせいでフォーマットとフィッティングは実戦でやることになるけど

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

山田先生がやってきた。それはもう転びそうな足取りで。

「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

「は、はいっ。すくくはくく、すくくはくく」

「はい、そこで止めて」

「うっ」

えっ？止めちゃうの？イヤイヤ、止めちゃダメだろう。ほらみろ、山田先生の顔がみるみる赤くなってるぞ！

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

いや止めようよ！無言じゃ無くてさあ！

「・・・・・・・・ぶはあっ！ま、まだですかあ？」

「「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者（野郎）」」

「千冬姉・・・神夜・・・」

パンツ！

お、織斑先生の固有技『馬鹿者叩き』が出た。

「織斑先生と呼べ。学習しろ。さもなくば死ね。・・・紅、お前も変な事を考えるな」

「申し訳ございません♪」

「そ、そ、それですねっ！オルコットさんの準備ができましたので織斑くんも準備してくださいっ！織斑くんのISもありますのでっ！」

「え？」

「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。この一週間の事を応用すればできる」

「あの？」

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えて見せろ。一夏」

「え？」

おお、篠ノ之さん居たんですね。

「・・・・・・・・頑張ってください」

「え？」

「君ならできる」

「被弾するなどはいわん。ただ壊したら・・・地獄行きだ」

「え？え？なん・・・」

「「「早くしろ（てください）！」」「」」

俺、山田先生、織斑先生、篠ノ之さん、士音、ティエリアの声が重なった。

さて、一夏の初陣だ！

神夜Side off

一夏Side

神夜達から声援（？）を貰ってピットに入る

ごごんっ、と鈍い音がして、ピット搬入口が開く。斜めに噛み合うタイプの防壁扉は、重い駆動音を響かせながらゆっくりとその向こう側を晒していく。

——そこに『白』が、いた。

白。真っ白。飾り気のない、無の色。眩しいほどの純白を纏ったISが、その装甲を解放して操縦者を待っていた。

「これが・・・・・・・・」

「はい！織斑くんの専用IS『白式』（びゃくしき）です」

真っ白なそれ。無機質なそれは、けれど俺を待っているように見えた。そう、こうなることをずっと前から待っていた。この時を、ただこの時を。

「すまないな。とある変態さんのせいで遅くなった」

「いや・・・・・・・・」

「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフイッティングは実戦でやれ。出来なければ負けるだけだ。分かったな」

せかされて、俺は純白のISに触れる。

「あれ・・・・・・・・？」

「どうした？何か変なところがあったか？何せ急ピッチで仕上げたから、俺自身、不安なんだが・・・」

神夜が不安そうに見てくる。

「いや・・・・・・・・試験の時に感じたあの電撃のような感覚がない・・・・・・・・だが・・・・・・・・ただ馴染む。理解できる。これが何なのか。何のためにあるのか。——分かる。これなら・・・・・・・・こいつなら俺は戦える！！」

「!・・・・・・フツ・・・・・・行って来い。もう勝ち負けなんざ関係ねえ、暴れて来やがれ!」

「応!」

「織斑、来い」

「はい!」

俺はこいつでセシリア・オルコットに勝つ!

「背中を預けるように、ああそうだ。座る感じで良い。後はシステムが最適化をする」

千冬姉の言う通り、装甲を開いているIS――白式に体を任せる。受け止めるような感じがしてから、すぐに俺の体に合わせて装甲が閉じた。

かしゅっ、かしゅっ、という空気を抜く音が響く。そして、生まれたときから我が身だったかのようなあの一体感。融和するように、適合するように、最初から俺のためだけにあつらえたかのように、白式が『繋がる』

解像度を一気に上げたかのようなクリアーな感覚が視界を中心に広がって、全身に行き渡る。各種センサーが告げてくる値は、どれも普段から見ているかのように理解できる。

「あ」

――戦闘待機状態のISを感知。操縦者セシリア・オルコット。I

Sネーム『ブルー・ティアーズ』戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備あり――。

「ISのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

いつもと同じ態度に見える千冬姉の、その微妙な声の震えも知覚できる。――ああ、心配してくれているんだな。

「大丈夫、千冬姉。いける」

「そうか」

ほっとしたような声。けれどそれはISのハイパーセンサーがなければわからないほどのブレだった

（まあ俺のこと名前で呼んでたし、やっぱわかるかな？）

それとなく、箒の方に意識を向ける。目を向ける必要はない。なにせ、自分の周り360度全包围が『見えている』から。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

何か言いたそうな、けれど言葉を迷っているような、そういう表情をしていた。これも、おそらく普段ならわからないレベルなんだろう。

「箒」

「な、なんだ？」

「神夜にああ言われたけどやっぱり勝ちたい。だから・・・応援よろしく」

「!・・・ああ!勝って来い!」

その言葉に首肯で答えて俺はピット・ゲートに進む。かすかに体を傾げるだけで白式はふわりと浮かび上がって前へと動いた。

ともあれ、ゲート開放まであと2, 05718422秒――『敵』がそこにいるのだから。

一夏Side off

第八話（後書き）

神夜「ああ、一週間も徹夜したんだっけ。大変だったなーあれは」
そうだねーでも結果的に間に合ったんだからよかったじゃん

神夜「追々、俺は一夏の後にやるんだぞ？寝不足でIS動かせない
なんてことになってみる、織斑先生が怒るぞ！」

やーい怒られてやんの。

神夜「お前・・・いっぺん殴られてみるか？」

え・・・イ、いや、やめっ、ヘブラツ！

神夜「悪は、滅した。次回も楽しむがいい・・・さらば！」

第九話

第九話

一夏Side

「あら、逃げずに来ましたのね」

セシリアがふふんと鼻を鳴らす。腰に手を当てたポーズが様になっている。

けれど俺の関心はそんなところではない。そんなところは、ハイパーセンサーは感知しない。

鮮やかな青色の機体『ブルーティアーズ』。その外見は、特徴的なフィン・アーマーを四枚背に従え、どこか王国騎士の気高さを感じさせる。

それを駆るセシリアの手には二メートルを超す長大な銃器——検索、六七口径特殊レーザーライフル（スターライトmk？）と一致——が握られていた。ISは元々宇宙空間での活動を前提に作られているので、原則空中に浮いている。そのため自分の背丈より大きな武器を扱うのは珍しくない。

アリーナ・ステージの直径は200メートル。発射から目標到達までの予測時間0，4秒。すでに試合開始の鐘は鳴っているので、いつ撃ってきてもおかしくはない。

「最後のチャンスを差し上げますわ」

腰に当てた手を俺のほうに、びっと人差し指を突き出した状態で向

けてくる。

コラコラ、人に指を向けてはいけませんって教わんなかったのか？

「チャンスって？」

「私が一方的な勝利を得るのは自明の理。ですからボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝するというのなら許してあげないこともなくってよ」

そう言って目を笑みに細める。――警戒、敵IS操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティのロック解除を確認。

ISが告げる情報を俺は一度飲み込んで理解する。そうしないと、あつという間に飲まれてしまいそうだ。セシリアにも、白式にも。

「そういうのはチャンスとは言わないな」

「そう？残念ですわ。それなら――」

――警告！敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

「お別れですわね！」

キューインッ！耳をつんざくような独特の音。それと同時に走った閃光が刹那、俺の体を撃ちぬく。

「うおっ!？」

白式のオートガードがどうにか俺の体を守ってくれた。直撃は避け

たものの、生形途中だった左肩の装甲が一撃で吹き飛ぶ。直後、遅れてやってきた衝撃は（ソニック・ブーム）に左腕がねじ切られるように引っ張られて神経情報としての痛みが稲妻のように走った。

「ぐ！・・・・・・・・」

――バリア貫通、ダメージ46。シールドエネルギー残量、954。実体ダメージ、レベル低。

（くそっ、俺が白式の反応速度に追いついていない！）

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」

射撃、射撃射撃射撃。まさに弾雨のごとき攻撃が降り注ぐ。ガンガンとS・Eが削られ、白式からのアラートが絶え間なく響いている。

「くっ！そ、装備、装備は！？」

白式に問うと、すぐさま現在展開可能な装備の一覧が現れる。――
――一覧？

「一個しかないんだが・・・」

『接近ブレード』と書かれた装備しか表示されない。はて、気のせいだろうか。はて。

「神夜！お前はそんなに俺が憎いか！？ええい、ままよっ！」

素手でやるよりはいい！俺は接近ブレード《名称未設定》を呼び出し（コール）、展開する。

キィィィン・・・・・・・・高周波の音とともに、俺の右腕から光の粒子が放出される。その手の中で形となって収まった。片刃のブレード、渡り1,5メートルはある長大な『刀』が俺の武器。

「中距離射撃型のわたくしに、近距離格闘装備で挑もうだなんて・・・・・・・・笑止ですわ！」

「ああ、俺だってそう思う。だが・・・・・・・・やってやるさ！」

引くわけにはいかない。激戦が、はじまった。

一夏Side off

神夜Side

《「神夜！お前はそんなに俺が憎いか！？」》

一夏が武器一覧を見てすぐにこんな声を上げた。

「もちろん憎い！」

「そんな大々的にいえるほどか・・・・・・・・」

「もちろんだ篠ノ之さん。あなたみたいな良い女を誑かしているのにも関わらずそれに気付いていない、あいつが憎い」

「い、良い女！？そ、そうか私は良い女なのか・・・・・・・・／／／／」

篠ノ之さんが顔を赤らめている。

「お前もあいつと同じではないのか………」

「大丈夫です。故意でやってますから。天然のあいつとは違います」

「そうなのか？……それはそれで問題だろう」

神夜Side off

一夏Side

「――二十七分。持った方ですわね。褒めて差し上げますわ」

「そりゃどうも………」

S・Eの残量67。実体ダメージ中破。武器はかろうじて使えるが、かろうじて使えるというだけだ。

「このブルーティアーズを前にして、初見でこうも耐えたのはあなたが初めてですわね」

そう言って、セシリアは自分の周りに浮いている四つの自立稼動兵器を、まるでfrisbeeを取ってきた犬を褒めるように撫でている。フィン状のパーツに直接特殊（BT）レーザーの銃口が開いている。その兵器はややこしいことに『ブルーティアーズ』というらしい。

「では閉幕と参りましよう」
フィナーレ

セシリアは笑みとともに右腕を横にかざす。すぐさま、命令を受けたブルー・ティアーズ……。ややこしいから以下ビットが二機多角的な直線起動で接近してくる。

「くっ……。！」

「左足、いただきますわ」

——まずい！装甲を失っているそこに攻撃を食らえば、必ず『絶対防御』が発動する。そうしたらシールドエネルギーは残量0。確実に俺の負けだ！

なら。一か八か——

「ぜああああっ！！！」

がぎんっ！派手な音と一瞬の火花。無理矢理の加速で、俺の体はセシリアのライフルの銃身に正面からぶつかった。その衝撃で砲口がそれ、なんとかとどめの一撃を免れる。

「な……。！？無茶苦茶なすわね。けれど無駄な足掻きっ！」

セシリアは距離を取り、空いている方の左手を横に振る。すると、それまで周囲の空間に待機していたビットが俺に向かって飛んできた。放たれるレーザーをぐり抜け、一閃。重い金属を切り裂く感覚が手のひらに伝わる。真つ二つにされたビットは断面に青い稲妻を走らせ、すぐに爆発した。——1機撃墜。

「なんですって!？」

「わかったぞ。この兵器は毎回お前が命令を送らないと動かない！
しかも——」

機動を先読みし、ビット2の後部推進器スラスターを破壊して落とす。

「——そのあいだ、お前はそれ以外の攻撃が出来ない。制御に意識を集中させているからだ。そうだろう？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！」

ひくくつとセシリアの右目尻が引きつった。凶星だな。残りビットは二機。しかも機動は読めた。【あれは必ず俺の反応が一番遠い角度を狙ってくる】。

（——やれる。俺はこいつに、勝つんだ。勝って筈に——・・・俺は何を考えてるんだ？まあなんにしても、距離を詰めればこちらが優位だ）

セシリアは自分でも言っていたように中距離射撃型だ。接近格闘の間合いで、あの長大なライフルが役に立つとは思えない。それに見ている限りでは接近用の装備がない。

『待機状態』の可能性もあるが、それにしたって間合いを詰められてから展開したのでは間に合わないはずだ。——俺はやっと見え始めた勝利に、わずかに心を躍らせていた。

一夏Side off

神夜Side

「はああ・・・・・・・・。すごいですねえ、織斑くん」

ピットでリアルタイムモニターを見ていた、山田先生がため息混じりにつぶやく。確かに一夏はISの機動が二回目とは思えないほどの健闘ぶりだった。

しかし織斑先生は対照的に忌々しげな顔をする

「あの馬鹿者。浮かれているな」

「え？ どうしてわかるんですか？」

「フム・・・織斑先生、それはさっきから一夏がやっている左手の開閉に関係が？」

「ほう、それに気付いたか。流石紅と言った所だな。そうだ、それは、あいつの昔からの癖だ。あれが出るときは大概簡単なミスをする」

「ヘエエエ・・・。。さすがご姉弟ですねー。そんな細かいとまでわかるなんて」

なんとなくそう言った山田先生に織斑先生はハツとする

「ま、まあ、何だ。あれでも一応私の弟だからな・・・。。」

織斑先生は少し頬を赤らめる。

「あー照れてるんですかー？ 照れてるんですねー？」

「あっ、山田先生それは言わない方が――」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ぎりりりりりっ。ヘッドロックが炸裂した。

「良いですよって・・・・・・・・遅かったか・・・・・・・・」

「いたたたたっっ!!」

「私はからかわれるのが嫌いだ」

「はっ、はいっ！わかりました！わかりましたから、離し——あうううっ！」

山田先生、ご愁傷様です・・・・・・・・。

ぎゃあぎゃあど騒ぐ山田先生とそれに手を合せる俺を気にもかけない様子で、ずっとモニターを見つめているのは篠ノ之さんだった。心なしか、その表情は陰しい。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

両手を合せて無事を祈るような真似はしない。篠ノ之さんはそういう性格ではない。それは、入学してすぐに本能的な感覚でわかつている。

しかし、だからこそ、その表情には色々なものが含まれていた。

「篠ノ之さん」

「・・・・・・・・なんだ」

「キミは一夏が、オルコット嬢に勝つと思っているかい？」

「当たり前だ！私はいつにに応援してくれと頼まれた、応援する時はあいつが勝つと信じなければならぬ。それに私自身もあいつに勝って欲しい！」

「……………そうか、だったら俺からもお願いだ」

「何だ？貴様も私に応援して欲しいのか？」

「いや、俺はいらない俺が勝つ事は決まっているし親友の未来の妻を取る趣味はないからな」

「妻！？／／／／」

「だが……………」

「だが？」

「あいつが無事に帰ってくることを祈って欲しい。そして、負けても、勝ってもお疲れ様、格好良かった。それだけでも言ってやってくれないか？男ってのはそれだけでも好きな相手に言われたら嬉しくて、疲れなんて吹っ飛ぶ、単純なもんなのさ。特にあいつはな」

（一夏……………）

篠ノ之さんは、一夏の心の奥底を暴露してやったのにそれに目もくれず唇を噛み締めた。そのとき、試合は大きく動いた。

神夜Side off

一夏Side

——獲った！

セシリアの間合いに入った俺は、振り下ろした刀でビット3を撃墜。そのままIS独自の無重力機動でビット4に回し蹴りをして吹き飛ばす。

ライフルの砲口は間に合わない。確実に一撃が入るタイミングだった。

「——かかりましたわ」

にやり、とセシリアが笑うのが見えた。——まずい！本能的に危険を感じて距離を置こうとするが、それこそ間に合わなかった。

ウンッ——

セシリアの腰部から広がるスカート状のアーマー。その突起が外れて、動いた。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あってよ！」

回避が間に合わない。しかも、さっきまでのレーザー射撃を行うビットではない。これは『弾道型^{ミサイル}』だ。

ドカアアアンッ！！

赤を超えて白い、その爆発と光に俺は包まれた。

一夏Side off

第九話（後書き）

こゝろゝやゝ。おゝまゝえゝ。

神夜「うおっ！ぞ、ゾンビ！」

誰がゾンビだ！？

神夜「お前」

ゾンビじゃねえ！それよりお前！この小説終わりにしたいのか！？

神夜「いや全然。前回はお前が全面的に悪い」

悪いのはお前だー！

神夜「はいはい、私が悪うござんした。じゃあ次回第十話お楽しみに」

勝手に終わりにすんなー！お前には一回言わなきゃってマジで終わり！？ちよつと待って！待って！待って！あー！

神夜「さよならー」

第十話（前書き）

いよいよ決着です！

では、ISく神の名のISく第十話どうぞ！

第十話

第十話

神夜Side

「一夏っ………！」

モニターを見つめていた篠ノ之さんは思わず声を上げた。

さっきまで騒いでいた、織斑先生と山田先生も、爆発の黒煙に埋まった画面を真剣な面持ちで注視する。

その中で俺は、微笑んでいた。

「——ふん」

黒煙が晴れたとき、織斑先生と俺は鼻を鳴らした。

「「機体に救われたな、馬鹿者め（野郎め。だが合格だ!）」」

まだかすかに漂っていた煙が、弾けるように吹き飛ばされる。

そしてその中心には、あの純白のISがあった。

そう、真の姿で——。

「一夏、初陣祝いだ。これを受け取れ！」

俺は自分のパソコンを操作し、ある物のデータを白式に送る。

神夜Side off

一夏Side

——フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押

してください。

(な、なんだ………?)

意識に直接データが送られてくる。と同時に目の前に現れるウィンドウ。その真中には「確認」とかかれたボタンがある。

訳もわからずそれを押すと、さらなる膨大なデータが流れ込んできた。

——いや、正確には整理されているんだ——。

それが感覚的に分かる。そして、変化は劇的に訪れた。

キイイイイン………。

高周波の金属音。けれどそれはどこか優しいものに感じられた。

刹那、俺の全身を包んでいる——いや、今我が身そのもののISが光の粒子に弾けて消え、そしてまた形を成す。

「これは………」

新しく形成されたIS装甲はまだぼんやりと光を放っている。それはさっきまでの実体ダメージが全て消え、それどころかより洗礼された形へと変化していた。

「ファースト・シフト一次移行!?! あ、あなた、今まで初期設定だけの機体で戦ってたって言うの!?!」

さっきのウィンドウに書かれていた『フォーマット初期化』と『フィッティング最適化』が終わったというのはつまりそういうことらしい。

これでやっと、この機体は俺専用になった。

改めて機体を見ると、最初の工業的な凹凸は消え、滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的などこかの中世の鎧を思わせるデザイン

へと変わっている。

そして何より変わったのは、その武器だった。

——接近特化ブレード・《雪片式型》

日本刀から生まれたようなその刀身は、刀より反りのある太刀に近い。鎬にはわずかに溝があり、そこから呼応するように光が漏れ出ている。妙に機械的なそれは間違いなくISの装備として作られたものであることを示していた。

それに何より、その名前だ。

——雪片。それは、かつて千冬姉が振るっていた専用IS装備の名称。刀に型成した形名。それが雪片。

——製作者からメッセージが届きました。読み込みますか？

白式に新しいウインドウが表示された。どうやら、神夜かららしい。このタイミングで渡してくるのだからとても大切なものなのだろう。俺は読み込みする事にした。

——ダウンロード中。達成率50・・・70・・・90・・・100%。ダウンロード終了。表示します。

ダウンロードが終了し、新しいウインドウが表示される。

「『このメッセージが開いたという事は、この機体、「白式」がフォーマットとフィッティングが終了——お前専用の機体になったということだ』」

（ああ、らしいな）

「『そして、お前は俺と、『とある人』の試験に合格したということだ』」

（とある人？試験？）

「『そんなお前に、俺達から試験合格祝いとしてあるプレゼントをしよう。ありがたく受け取れ』」

（プレゼント？）

——メッセージに付属されていた、ファースト・アビリティーとセカンド・アビリティーの情報を表示します。

名称 零落白夜 （れいらくびやくや）

名称 白桜^{しろおう}

「『これが俺達から、お前へのプレゼントだ。詳しい事は後で俺に聞け。んじゃ、また後で』」

——以上です。

神夜からのメッセージが終わった。分からない事ばかりだったけど、これだけは、分かる。

……ああ、まったく。つくづく思い知らされる。

「俺は世界で最高の家族を持ったよ」

あの人たちには守られっぱなしだ。そろそろ守られるだけの関係は終わりにしよう。

これからは——

「俺も、俺の家族を守る」

「・・・・・・・・・・は？あなた、何を言って――」

「とりあえずは、千冬姉や神夜の名前を守るさ！」

元日本代表と世界を又に掛ける会社の社長の、その弟。それが不出来では、格好がつかない。そう、あの格好良い千冬姉が格好がつかないなんて、冗談もいいところだ。しかも笑えない。

「というか、逆に笑われるだろ（あれ？弟？そう言えば、俺と神夜ってどっちが兄なんだ？まあ良いやあとで聞こう）」

「だからさつきから何の話を・・・・・・・・・・ああもう、面倒ですわ！」

弾頭を再装填したビットが二機、セシリアの命令で飛んでくる。またあの多角形直線機動だ。しかも射撃型ビットよりも速い。だが――

（見える・・・・・・・・・・！）

右手を握りしめる。応えるように、低い機械音を鳴らす《雪片》。使い方なら分かっている。

千冬姉に隠れて何度も見た試合の映像。そこでどう使っていたかを覚えていてる。

ギンッ――！

横一閃。両断されたビットは、けれど慣性のまま俺の横を通りすぎて、そして爆ぜた。爆発の衝撃が背中にくより速く、俺は再度セシリアに突撃する。機体の瞬間速度、センサー解像度はさつきとまるで比じゃない。圧倒的に使いやすい。

「おおおっ！」

手の中でエネルギーがその密度を増していくのを感じる。刹那、雪片の刀身が光を帯び、より強い力の存在を俺に伝えてきた。

(いける………！『零落白夜』！)

セシリアの懷に飛び込んだ俺は、下段から上段への逆袈裟払いを放つ。

――が、その斬撃が当たる直前に決着を告げるブザーが鳴り響いた。

『試合終了。勝者――セシリア・オルコット』

アリーナに機械音声が響き渡った。

そして、地獄への門が開いた……………

一夏Side off

第十話（後書き）

どうでしたか？

神夜と一夏どっちが兄になるんですかねえ。

もしかしたら親子関係に！？

ま、それは後々考えます。何か案があったら感想と一緒に送ってくれたら嬉しいです。

それではまた、十一話で！ノシ

第十一話（前書き）

どもども、お久しぶりです。

大神です。

ちよつと家のゴタゴタで更新遅くなりました。

神夜「ほんとだな」

まあまあそう言わずに。傷ついちゃうから、精神的にも、身体的にも。

神夜「身体的にも!?!」

まあ、その話は置いといて

神夜「置いちゃうの!?!」

・・・・・・暫く見ないうちにツツコミがうまくなったね

神夜「誰かさんのおかげでねえ!」

そうか、一夏のせいか・・・・・・

神夜「あんただよ!」

失礼な。生みの親に向かってなんてことを。

まあいい。

後書きで、アンケートを催すので、協力していただけたら嬉しいですよ!（^^）／

それでは、ISく神の名のISく第十一話はじまります!

第十一話

第十一話

神夜Side

《「試合終了。勝者、セシリア・オルコット」》

んーと、前回のあらすじとしては一夏が油断して、セシリア・オルコットに負けた。ってこれ誰に言ってるんだ？前回のあらすじってなに？なんか変な電波を拾った……。

「……………え？」

どうやら、山田先生と篠ノ之さんは、まだ状況を判断できていないようだ。「なんで？」という顔をしている。その中で織斑先生は「やれやれ」という顔をしている。

「さて、じゃあ皆さん、一夏（大馬鹿野郎）を迎えにいきましょうか」

そして、俺たちはピットへと向かった。

神夜Side off

一夏Side

「「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ（もんだな）。それでこの結果か、大馬鹿者（野郎）」」

試合が終わって、俺は馬鹿者から大馬鹿者になっていた。すげえ嬉しくないランクアップだった。ダウンではないのが千冬姉と神夜らしい。

（てか、二人とも息が合いすぎだろ。もう付き合っちゃまえよ）

「余計な事を考えていていいのか、一夏？」

（俺にプライバシーを保護する権利はないのか？）

あれですか？俺の周りの人間は読心術が必需事項なんですか？

「どうだろうな」

「とにかく、武器の特性とアビリティーの特性を考えずに使うからあなるのだ。身を持って分かっただろう。明日からも訓練に励め。暇があればISを起動しろ。良いな」

「・・・・・・・・はい」

頷く。頷くしかないよなあ・・・・・・・・。あんな大見得切って負けりゃさあ。

「えっと、ISは今待機状態になってますけど、織斑くんが呼び出せばすぐに展開できます。ただし、規則があるのでちゃんと読んでおいてくださいね。はい、これ」

どさっ。どさっていったよ、今。目の前のこれは何だ？IS起動におけるルールブックと書いてあるが「あなたの町の電話帳」じゃないのか？すげえ分厚い上に、一枚一枚がめちゃくちゃぺら紙なんだ

けど……何ページあるんだよ、これ……。

「ふん。では次は紅だ。用意をしろ」

「はい。……篠ノ之さん、さっきの約束、忘れないでくれよ？」

「！……わ、分かった」

ん？約束？なんか箒も紅くなってるし。何なんだ？

「タイムリミットは俺が帰ってくるまでだから」

「なッ！聞いてないぞ！」

「言っていないからな。良しじゃあ行きますか」

一夏Side off

神夜Side

「目覚めろ、ゼウス（創造神）！」

俺の体にゼウスの装甲が『繋がる』。

創造神の形は単調だ。白式のような装甲が薄く体中広がっていて、背中にコーン型の機構あり、そこから緑色の粒子を出している。頭にはこれまた白いバイザーがある。

「ほう、これがお前のISの本来の姿か」

「ええ、まあ一応」

そういえば織斑先生はこの姿を見るのは初めてか。

「あれ？ちふ……織斑先生は入試のときに神夜のISを見
たんじゃないんですか？」

「ああ、あの時はすぐに変化しちゃったから」

「「変化？」」

一夏と篠ノ之さんがどう言う事？という顔をする。

「まあ、見てろよ」

俺は体中の力を抜き、言葉を放つ。

「能力解放創造、白式！ワンオフ・アビリティー、色彩多色、黒！」
スキルオーバーンクリエーション カメラオン

一度俺を包んだ装甲が『分離』し、瞬時にまた『繋がる』。

「魅せろ、黒式！」
くろしき

そして、黒い白式が現れる。

「これは……どういう事だ？」

一夏は驚きを隠せない。それもそうだ、自分専用のISが俺に
乗っているのだから。

「んー、簡単にいえば、これが俺の本氣ってことかな」

俺は、黒式をゼウスに戻した。

「「は？」」

「まあ詳しい事は後でな？俺は今からどこぞの自意識過剰なお嬢ちゃんを絶望の淵に落としに行かなくちゃいけないんだよ。土音を怒らせた罪は重いんだぜ？」

「神夜、どうする？僕は付いて行った方が良いのか？」

「ティエリアか、どうするかな……。そうだな、来い。余りすることはないだろうがな」

「了解、ティエリア・アーデ、ゼウスにコンタクト完了、目標を殲滅する」

ピット・ゲートに進み、発進する。

「紅 神夜、ゼウス、目標を滅する」

俺は大空へ羽ばたく。間違った感性をぶち壊すために。

第十一話（後書き）

☆☆☆☆☆☆やってきた！ヒロインは誰がいいかなアンケート！
☆☆☆☆☆☆☆☆

さあ、やって参りました、ヒロインは誰がいいかなアンケート！
参加の仕方は簡単。

下のレビューの欄に、あなたのヒロインにしたい娘の名前を入れて、
この大神に送っていただければそれでOK！

でも、出来ればで良いので、こういう風に馴れ初めあうのかアイデア
ニアを頂きたいです。

候補はこの中からお願いします。

セシリア・オルコット

鳳鈴音

シャルロット・デュノア

ラウラ・ボーデリツヒ

織斑千冬

山田真耶

オリキャラ

この中でお願いします。

楯無姉妹は、大変そうなのでちょっと……すみません。でも余裕が出来たらやろうと思います。

あ、もちろん上の中の娘でハーレムルートっていうのも有りですよ？

箒「私が上にいないのはなぜだ？」

あ、それはねえ――

神夜「何だ、二人も彼氏がほしいのか？お盛んだねえ」

箒「なっ／＼／＼／＼／＼そんなわけなろう！私には一夏だけで十分だ！」

こんなところでのろけるな。のろけるのなら本編でやれ！

箒「の、のろけてなどいない！」

はいはい。ツンデレは良いから、そろそろ締めるよ。

はい、そんなわけでアンケートにご協力いただけたら幸いです。期限は私が第十三話を更新するまででございます。早めに送ってください。

感想も一緒に送っていただけると嬉しいです。やるきが出ます。

それでは、第十二話でお会いしましょう。さようなら

神夜「さようなら」。ほら、篠ノ乃もファンサービス」

箒「うむ。今後もこの駄作者が、頑張れるように応援してやってほしい。感想も送ってもらえたら、こんな駄作者でもやる気を出してどんどん更新していくだろう。それでは、さらばだ」

第十二話（前書き）

どどもども。大神です。

更新、遅くなってしまつてすみません！
いつもながら駄文ですが、始まります！

第十二話

一夏Side

「紅 神夜、ゼウス、目標を滅する」

俺は混乱していた。自分専用ISのはずの機体が神夜のISと酷似していたからだ。しかし、ならば今、神夜の纏っているISの形状は何だ？

俺は自然と険しい顔つきになる

「……………一夏お兄ちゃんどうしたんですか？」

俺の険しい顔を見た、土音君が俺を心配そうな顔で見上げる。

「……………お怪我でもしましたか？」

「なに！？一夏、怪我しているのか？」

「えっ！いいや違う。ただ……………」

「ただ、どうしたんだ？」

「ただ……………わからない事があってな……………」

「その疑問は後で紅に解いてもらえ」

「千冬姉……………」

パンツッ!!

「ぐおおおおお」

「織斑先生だ。馬鹿者」

でたよ、固有技『馬鹿者叩き』（神夜命名）。いつも思うんだが、その出席簿どこから出してんだよ……。

「変な疑問は持たずに、今は紅の戦い方を見ろ。少しは強くなりた
いんだったらな」

「強く……」

そして俺はモニターに目を向ける。

一夏Side off

神夜Side

「よう、すまん少し遅れた」

ピットからでた俺は、先にアリーナ内に出ていた、セシリア・オル
コットに遅れた事を謝罪した。

「織斑……一夏……」

「あ？」

しかし、帰ってきたのは俺の謝罪に対する返事じゃなく、一夏を呼

ぶ声だった。

（あれ？もしかして・・・・・・・・これはまさか・・・・・・・・立ったか？フラグ。ああ、赤面してるからそうだな）

あいつ、フラグ立てやがった。好きな相手がいるってのに。あいつはあれか？某学園都市の上○さんか？

「織斑・・・・・・・・一夏・・・・・・・・ふふっ」

うわ～、悦に入ってやがるぜ。こういう相手に話し掛けたくないんだよな～。でも話し掛けないと始らないんだよな。しゃー無い。

「セシリア・オルコットオ!!」

とりあえず叫ぶ。

「ひゃうっ!」

反応あり。

「な、何ですの?!」

「何ですの?じゃねーよ。さっきから話し掛けても反応ねえけど、どうしたんだ?」

「な、なんでもないですわ!」

白を切るか、だったら・・・・・・・・

「は？」

(何やってんだこいつ・・・・・・・・)

「先日のご無礼、本当に反省してますわ」

セシリア・オルコットは言葉を言葉を繋ぐ。

「わたくしは間違っていましたわ。わたくしは今まで男というのは下等な生物だと思っていました」

ちよつとイラツと来る所があつたが気にしない

「でも今は違います。世の中には“一夏さん”のような素晴らしい方がいる事を知りました」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あなたも“一夏さん”のように素晴らしい方なのですか？」

「・・・・・・・・・・どう・・・・・・・・なのかな・・・・・・・・俺には分からねえや。」

だから、感じてみな！一夏の時のように！分かるかも知れねえぜ！」

「そうさせていただきますわ！」

《「それでは、始めてください！」》 ビィーーーーー。

「行くぞお！セシリア・オルコットオオオオ！」

「セシリアとお呼び下さい！！最初から本気で行きますわよ！ブルーティアーズ！」

セシリアがビットを射出する。だが……！！

「こんなもの、避けない方が難しいぜ！」

俺はビットからの攻撃を簡単にかわす。

「な！？」

「手本を見せてやる。スキルオーバーン クリエイション能力解放創造ブルーティアーズ！ワンオフ・アビリティー、カメレオン色彩多色紅！」

ゼウスの装甲が俺から離れ、純白だった色が真紅に染まる。そして、ゼウス全体の形が崩れ、再び纏まる。形を換えて。それから、再び俺の体に『繋がる』。

「血の雫を垂らせ！レッドティアーズ！」

神夜Side off

第十二話（後書き）

ヒロイン決定アンケート途中結果発表！

同率一位！織斑千冬、シャルロット・デュノア 四票！

第二位これまた同率！鳳鈴音、篠ノ之束、山田真耶、ラウラ・ボー
デリッヒ 一票！

第三位、セシリア・オルコット 0票！

神夜「セシリア人気皆無（笑）」

その代わり、千冬さんとシャル大人気！やっぱねー、シャルは常識人だし、千冬さんは照れたらかわいいしねー！

神夜「とまあ、こんな感じですので、皆さんもこのアンケートに参加して下さい！あと、何回でも応募して下さい結構です！その分だけそのキャラクターへの愛が感じられますから！」

あとこの間、OVA見たらすごくおもしろかったです！皆さんもどうですか？

それでは、また十三話で！次回でアンケート終了ですよ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9686v/>

IS～神の名のIS～

2011年12月22日16時59分発行